

1 月



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2013年
1月号
No. 595

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



謹 賀 新 年

平成二十五年 元日



松と寒牡丹

△1頁の花▽ 仙溪

手も凍える寒さの中で、菰に覆われて健気に花色をのぞかせる寒牡丹の赤い花。敢えて厳しい環境に挑むように顔を紅潮させて開こうとする花の気品に触れたくて、貴重な花を切つて松といけた。

自分はこの寒牡丹のように敢えて困難に向かつていつているだろうか。この貴い命をいけるに値する人になつてゐるだろうか。父だったらこの寒牡丹をどんなふうにいけるだろうか。

花材 寒牡丹 松
花器 陶コンポート(宇野仁松作)

南天と白菊

△2頁の花▽ 仙溪

いけるまでは平凡なとり合わせすぎて、「テキスト」の作例になるだろうかとか心配していたが、この平凡さがかえつて新鮮な一作となつた。ただし菊の品種、花器の選択といったものが別のものだったら、平凡なだけのいけばなになつていたかもしれない。もし別の花器にいつてあつたら、などと想像しながらご覧いただくのも、感覚を磨く一つの方法だと思う。

花材 南天 菊
花器 魚耳陶花瓶

△表紙の花▽の解説は10頁。



寒桜の投入

主材 寒桜（薔薇科）

副材 水仙（彼岸花科）

洋菊（アナスタシア・菊科）

いけばなで初冬に「寒桜」の名前でいけているのは「十月桜」もしくは「子福桜」で花は八重。ほかに「冬桜」や「四季桜」などの一重咲きの冬に咲く桜があり、これらは山の斜面を埋め尽くすように咲く名所があるので、一度訪れてみてはいかがだろうか。

冬桜の名所では群馬県藤岡市おにし鬼石が有名で七千本が育つ。（テキスト581号でも紹介した。）

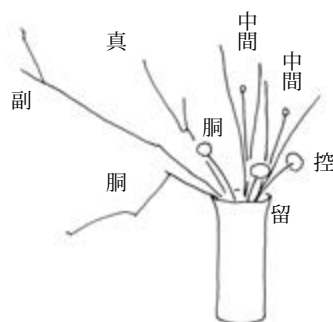
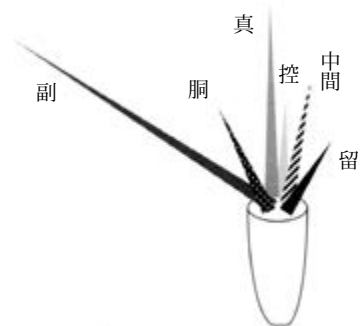
四季桜の名所としては愛知県豊田市小原で一万本の四季桜がいつせいに咲き、紅葉とのコントラストが絶妙だそうだ。

作例の寒桜は「子福桜」だと思う。枝を広げすぎると寂しくなるので、主になる枝をとめたら、その枝の後に別の枝を重ねる。

季節の花として水仙をとり合わせ、濃赤色の洋菊で水際の茂みと温かな色彩を加えた。

この投入では菊の選択がポイントになっている。アナスタシアという洋菊は秋以外に使っても花がモダンなので違和感がない。また濃い赤色を選ぶことで寒桜の冬枯れた風情にあたたかみを加えることができる。

斜体副主型



横から見たところ





③ 濃赤色の洋菊（アナスタシア）を左前方へ出して、寒桜の足もとを整える。



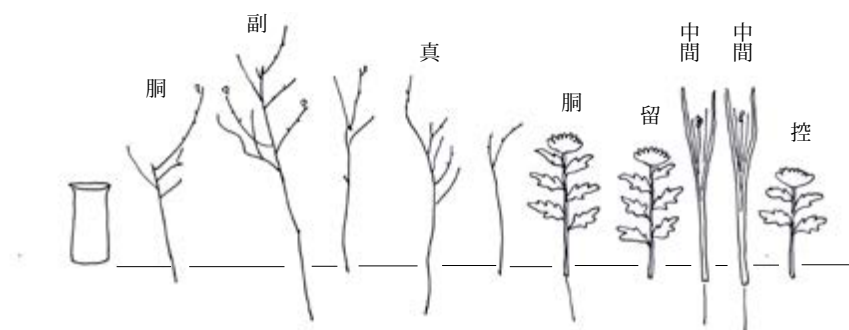
① 器の口から少し下に竹串で十文字配りをかけておく。
寒桜の主になる枝を斜め横（やや前方）へ伸びてゆくように留める（副の位置）。



④ 濃赤色の洋菊をさらに二本加えたところ。右前方の留の位置と、右後方の控。



② 寒桜の別の枝を主枝の前後に加える。



花器の水際

それぞれの長さ

赤芽柳

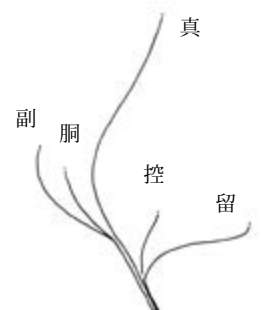
仙溪

花型 草型 留流し
花器 煤竹筒

先月号の行李柳の生花や、この赤芽柳の生花では、生け上がるまでの過程に特別な技術が必要で、その技

術の習得には繰り返し返していけることが大切で、それ以外の近道はない。枝の足もとの冬芽を切りとることにしても最初のうちはなかなかうまく切れないが、何度もいけていくうちに、コツがわかってくる。

水際がきゅっと一つに揃うまでには年数がかかるが、何度もいけるうちにすこしずつ技が身につくものだ。根気よく積み重ねることですキルアップを目指そう。



床の間のこと

床の間の花の置き方について基本的なことをまとめてみる。



右の写真は私の家の茶室の床で、床柱の右に床があるので上座床（本勝手手の床）である。床柱の左側に床があれば下座床（逆勝手手の床）になる。



この本勝手手の床には本勝手手の花を床柱に寄せていけるのが一般的である。（右の若松と椿の生花のように）もともと床には床柱と反対側に書院が付いていて、外の光を障子越しに取り込む明かり口の役目があり、床柱側に花を置いた方が明かりを受ける形になって収まりも良い。

ただし、その逆に明かり口側（上

石化柳 水仙

仙溪

花型 草型 二種挿し

花器 煤竹竹筒

石化柳は尾上柳の園芸品種とされている。篋状に枝が帯化する植物に
はこの石化柳以外にも石化金雀児が

あるが、どちらでもいいけな花材に
なっている。

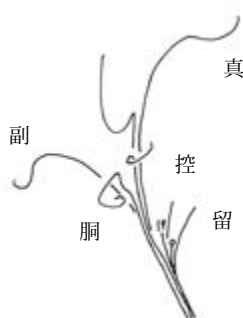
石化した部分は撓められる方向と
撓められない方向があるので、どの
役枝にむいた枝かを考えながら各枝
を組み合わせてみてからいけ進め
る。

石化柳五本で真、真開、見越、副

胴をつくり、水仙を葉組して留、控
に加えた。

水仙の留は、足もとが水際から広
がってしまいやすいので、水際をい
かに細く寄せられるかがポイントと
なる。

水仙以外なら、椿の留もいい。



座)に花を置き、上座に座った客が
花をゆくりと観賞できるようにと
の配慮がなされることもある。つま
り先ほどの考え方とは逆になる。ま
た現代では明かり口が無かったり幅
の狭い床も多く、花の位置は床の大
きさや花の大きさ、花型によって柔
軟に考えて飾ればいだろう。

右か左かは置いておくとして、床
の間に花を飾る場合の心得を書いて
おこう。

掛物には横物(横軸)と豎物(立
軸)のふたつがあり、横物のときは
掛花か、軸の下(床の中央)に花を
置く。豎物ならば花は脇へ譲って置
くのが基本である。

また掛物に書かれた花をいけるこ
とは避け、人物が描かれていればそ
の顔に枝がかからないように、名や
印を隠さないように注意する。

置花生は畳床には薄板を敷き、板
床ならば直に置く。

「本床」は床柱には面取りした角
材を用い、床框は床柱と其木の漆塗
りで付書院があり、床脇に違い棚が
ある。

床板と畳の上面を揃えた「踏込み
床」、畳より床板の上面を高くした
「蹴込み床」のほか、「琵琶床」、「洞
床」、「袋床」、「釣床」、「置き床」(移
動できる簡易な床)などの様式があ
る。

さらに茶道では掛け軸のほかに香
炉や香合を飾ったときは花入れを置
かない決まりがある。





金彩花器

櫻子

柳原睦夫さんの花器の底は、ピンクと黄色の雲のような構図の中に金彩を走らせてある。その金が付いた花器の縁にも現れる。

柳原さんの花器は外側、内側、底にも彩色してあって、どの器も情熱的で個性が強い。花をいける時はかなり緊張して花選びから良く考えねばならない。生け手の事などはあまり考えずに作陶されているのだから。とてもいけにくい器が多い。

しかし一度でも花が上手にいけられたなら、この花器の魅力にとり憑かれてしまう。父も母も仙溪も私も。

花材 カラー(ホットチョコレート)

スイートピー シクラメン



新年の花 〈表紙の花〉 櫻子

お正月の準備のため、暮れに花を買い求めるのだが、明るい色の花がなくて苦労することが多い。

赤い実は南天か千両なので決まったスタイルになってしまふ。今年は梅擬^{うめもじぎ}が遅くまで残ってくれていて有難かった。

梅擬の艶やかで真っ赤な色は見ているだけでも元気になる。

小さな葉を取る作業が大変で手間をかけて出荷されるが、小枝までたっぷりの実をつけて豊かな実りを感じる。粒の大きな大納言という品種をいけているが、良く日持ちする。

水仙、松、椿は緑の葉の色合いがそれぞれに違うので三種取り合わせても清々しい。梅擬の赤色に「富春杯」（この器の名）の朱が綺麗に調和している。

お土産に頂いたルーマニア製の刺繍の敷物が素朴で優しい。

同じとし頃？

〈10頁の花〉 櫻子

洋蘭はとても多くの種類がある。

世界中に蘭は3万から3万5千種あると言われている中で人の手によって改良された交配種も沢山作られている。

アマリリスと取り合わせた蘭は、オンシジウム・ワイルドキャットで学名はコルナマラ・ワイルドキャットという。

コルナマラ属はミルトニア属×オドントグロッサム属×オンシジウム属との属間交配によって生まれた新しい属。



1963年に登録されたという事は同じ年くらいの蘭なのかも。長い歴史を持つ蘭の栽培ではニューフェイス！

人の手によって作られた蘭はこれからも沢山お目にかかるだろう。

アランダやモカラもお稽古でもいける事が多い蘭だが、同じく原産地を知らない。

花材 アマリリス

オンシジウム・ワイルド

キャット

アンスリウム・コーヒー

カップ ミリオクラダス

なごり雪 〓11頁の花〓 櫻子

胡蝶蘭はラン科ファレノプシス属で原産地は東南アジアを中心にインド、台湾、オーストラリア北部などに広がる。

今でも自生地では高い樹木や岩の上にしつかりと根を張り着生する蘭で仲間のオンシジウムやバンダ、デンドロビュームも野生では過酷な環境であっても人の手など一切必要とせず毎年時期がくれば自然に開化する。

そんな高貴な花は育てるのは難しい。花を咲かせるのは困難だとわかっているので、毎年新種が出ると驚きで魅入ってしまう。

「なごり雪」は花の大きさが3cmほどの小さな胡蝶蘭だ。寒さに強いのでこの名前になったとの事。

大好きだった歌と同じ名前前で、早速赤いワイングラスに葉牡丹といけて新年の食卓に飾った。



マユハケオモト 仙溪

眉刷毛万年青まゆはけおもとは南アフリカ原産で、彼岸花科ハエマンサス属の常緑多年草。花の姿を眉刷毛に見立ててこの名前がついた。

鉢植えから根つごと抜いて土を洗い落とすと、球根状の鱗茎と太い根が残るので、そのまま器にいけることで長い間いけて鑑賞することができる。そのままと転んでしまうので、剣山に棒を立てておき、針金で倒れないように固定している。

陶器の大きな片口に水を少なめに入れ、眉刷毛万年青を二株とめてから千両を短く挿し加えた。

幅の広い肉厚の葉はおおらかな美しさがあり、不思議な花をつけた太い花茎とともに見ていて見飽きない。これほど茎の立派なものも珍しいので、横へ出た花を生かす横長の花型にして、横長の塗りのお盆に片側に寄せて飾ってみた。

漆器には上質の品格が備わっている。漆が何度も塗り重ねられた器には、時間と手間を惜しまない物作りの魂が宿っているように思う。少しずつの積み重ねを大切に、心をこめてやり続けてこそ得られるもの。そんな心のこもった物を、物も心も大切にしながら使うことが豊かさではないかと最近思うようになった。

物に宿る心を感じ取る、豊かな心が持てるように、精進したい。

訃報

12月18日、午前7時22分。父、桑原仙齋が85才で他界いたしました。

通夜と密葬は近親者のみで営ませていただき、本葬は1月19日(土)午後2時より、京都市上京区寺町通広小路上ルの廬山寺にてさせていただきますことになりました。

本葬の際、ご供花はご辞退させていただきます。

生前のご厚誼に感謝申し上げますとともに、謹んでお知らせ申し上げます

桑原 仙溪

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2014 年
1 月号
No. 607

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



謹
賀
新
年

平成二十六年 元日



温故知新

仙溪

「温故知新」は孔子が論語の中で、師となる条件として先人の思想や学問を研究するよう延べた言葉で、「ふるきをたずねてあたらしきをしる」とも読まれている。

ここで「温」という字が使われているのは何故だろう。うわべだけでなく、時間をかけて温めるように研究しなさいということだろうか。私たちのまわりの古くからあるもの。古くから伝わること。それらに命を吹き込めということだろうか。

私たちの花道では練習ではなく「稽古」と言う。「稽」は「考える」という意味で、「いにしえをかんがえる」ということになる。昔のことを調べ、今なすべきことは何かを正しく知るというのが元の意味で、学問での言葉だったのが、芸能や武術を学んだり習うことにも使われるようになった。

先人の思想や学問を研究したり、昔のことを調べなさいと言われても、何から手をつければいいものか。でも、自分自身が道に迷ったり、物事に行き詰まった時に、昔の人はどうしてたんだろうかと、その時初めて自分で「探す」というのでいいと思う。大事なのはもがいて掴もうとする求道の精神だ。

今まで導いてくれた両親を亡くして、大切なものを「探す」毎日。「稽古」と「温故知新」を肝に銘じて、いけばなの道を進んで行こうと思う。





山茱萸 椿 仙溪

花型 草型 内副流し
花器 鉄釉広口花瓶
山の茱萸と書いて山茱萸。春に黄色の小さな花が密集して咲き、秋に楕円形の赤い実がぶら下がる。見るからに美味しそうだが、お弟子さんが蜜煮にしてくださったことがあり、なかなか美味だった。韓国では庭に植えておき、実は薬にすると聞いたことがある。強精薬、止血、解熱作用があるらしい。

春の花の黄色も鮮やかだが、初冬に葉が落ちたあと、たわなに赤い実がぶらさがっている姿も感動的である。つるりとした赤い実の力強さは、大陸由来のものだ。

山茱萸は中国、朝鮮半島の原産で、日本へは江戸時代中期に薬用としてもたらされた。水木科・水木属の落葉小高木。枝にねばりがあり、撓めがきくので生花の稽古にもよくいける。

花屋で急角度に曲がった枝を見つけたので、内副に用いてみた。どんな作用でこんな曲がり方をするのだろう。猿が折ったのがそのまま固まったものか。



能の中の立花

仙溪

後：都・五条の辺（京都市
下京区五条通辺り）

能の「半部」の前場は僧侶が立花供養をしているところから始まる。

「立花供養」とはどんなものか。

「花の供養。花を立てて、花に回向する。」（中央公論社『解説・謡曲全集』より）

「切り取られた花々のために花を生けて、供養を行う仏事。」（小学館『日本古典文学大系』謡曲集より）
この「花を供養する心」が「半部」の要になっていると思う。

「半部」はじとみ

作者 内藤左衛門

素材 『源氏物語』夕顔の巻

場所 前：都・紫野雲林院（京都
市北区紫野雲林院町）



能「半部」の舞台上に立てられた松真の立花。父・仙齋作。一九八一年四月。

季節 秋

時代 平安時代の想定

演能時間 約1時間20分

■あらすじ

都の雲林院の僧が夏の修行の終わりに立花供養を行っている、1人の女が現れ夕顔の花を手向ける。僧が名を尋ねても答えずに五条辺りに住むことだけを言い残して花の陰に消え失せた。所の者に光源氏と夕顔の恋物語を聞いた僧は夕顔の霊を弔うため五条辺りを訪ねると、軒先に夕顔の花が咲いた荒れ果てた家がある。秋の月を眺め『源氏物語』を忍んでいると、半部が押し上げられ夕顔の霊が現れ、夕顔の花が縁で契った光源氏との恋の思い出を語り舞を

舞う。やがて夜明けの鐘の音と共にまた半部の中に消え去った。

■語句解説

半部：昔の建築様式で寝殿などの板壁の一部。上半分を窓のように押し上げられる部戸。

部戸：格子の裏に板を張った戸。

■小書

立花供養（観世・宝生・金剛・喜多）※舞台上実際に立花が供えられる。替之型（金剛）
（ここまで、大槻能楽堂ホームページより転載）



「源氏・拾花春秋」『夕顔』より「夕顔の生花」。仙齋画。

光源氏が下町でめぐりあった美女の家の垣根に仄々と咲いていた夕顔の花。源氏がこの女性を夕顔と呼んで愛したのもつかの間、はかなく世を去ってしまう。「半部」ではこの夕顔の霊が現れて供養を願い出る。夕顔の霊は、花を大事にする僧侶に心を開いて部戸を開ける。源氏の君に摘まれて命を縮めたのは幸せな一夜の想い出。後悔はなかったようだ。

「半部」で思い出すのは、父（仙齋）が舞台の立花を担当した時のこと。私は大学の3年生だった。「テキスト215号（1981年5月）」で紹介されているので次に引用する。

4月12日に大阪のフェスティバルホールで上演される能楽「半部」のための立花を頼まれていたので10日から幹作りにかかった。

11日には大阪に運び、フェスティバルホールの大舞台で組み上げたが、2mの高さと横幅、奥行きがあるので相当な重量になる。しかも上演の際、橋がかりを舞台まで演者によって運ばれるのである。だから絶対ゆれても崩れないようにきっちりとした立て方をしなければならぬ。

又観客の方から見ての遠目を考えて、それぞれの枝の減り張りもはつきりつけなくてはならない。おまけに四方正面の立花でなくてはならないと「なくてはならない」が、うんと付く花である。

だが吉田忠史君と中川和則君の協力で、楽しく仕事が出来て、美しい品の良い立花が立てられた。12日の当日は前記の二人に櫻子がついて行ってくれ、いざという時にそなえて、中川君が能装束をつけて舞台の袖で待機してしてくれたさうである。（引用おわり）

文中の中川君というのが私であ

る。

「幹作り」は主に松の立花を立てる場合に、その骨組みを作る作業のことで、幹をとめる切り口の切り方や立て幹への留め方に熟練の技が必要となる。今は電動ドリルというものがあるので、木ねじで簡単にできる作業も、昔は錐で穴を開けて釘を打って留めていた。そうすると、必ず一度は指を金槌でたたいてしまう。みんな痛い思いをしながら腕をあげてゆくのである。

さて、家元宅で手にあざをつくりながら立花の下準備を手伝い、翌日大阪へ運んで舞台脇で仕上げたわけだが、写真のように大層立派な立花だった。四方どこからみてもバランス良く、立花とは美しいものだと思っただけを覚えている。

本番の日、父は母とはなと3人で岡山県の直門会いけばな展へ行かねばならず、吉田さん、櫻子、私の3人が立花の守り役になった。演者の衣装が当たって倒れた時には私が飛び出ていき、対処することになっていった。羽織袴を着せられて、じつと舞台を見つめ続けたので、心身共にたくたになった。幸い立花は倒れることなく、重厚な松に正真の杜若が映えて大変好評で、ただ舞台袖で見守っていただけだったが、大役をやり終えた安堵感で、帰り道の気分爽快であったことも思い出される。私が父の立花を手伝った、おそらく最初の想い出である。



古い中国の器

△表紙の花▽ 仙溪

器の要素には色、質感、形があるが、なかでも「形」の不思議さというか、微妙な違いで感じ方が変わるのが面白いと思う。

表紙の器は古い中国の器だが、口の作り方から陶工の凄みのようなものを感じて、持つ手が震えた。これだけ完璧な姿であるにもかかわらず、口の作りは裂けた岩のような自然な仕上げで、いかにも花が挿されるのを待っている気配がする。

花をいけると隠れて見えないので、いけた花はなんともおどろかな豊かさを感じる花になる。けれども花を挿す最初の緊張感はこの器ならではのものだ。

緊張する器。なんでも映える器。器も様々である。

花材 仏手柑（蜜柑科）

デンファレ一種（蘭科）

花器 龍耳付瑠璃釉壺



こま型の花器

△2頁の花▽ 櫻子

20年ぶりくらいに蔵の整理整頓を行なった。奥に仕舞われていて、中々お目見えしない花器も多いのだが、久しぶりに懐かしい花器も出てきた。

この花器は1976年に、両親が祖父へのお土産にローマで買ってきたもの。（テキスト156号で紹介）

イタリアらしい明るい色使い、ユニークなたち。祖父は気に入って、よく花をいけていたことを思い出した。小さいけれどぴりつと強い感覚をうける花器とテキストには書かれている。花のことは丁寧な書かれていたが、花器の話はそれほど多くない。もっと書いて欲しかったなと思う。

花材 若松（松科）

葉牡丹（油菜科）

オンシジウム（蘭科）

花器 細口陶花器



襲名記念の器

△3頁の花▽ 仙溪

テイカカズラは茎から気根を出して他のものに固着する、蔓性常緑低木。和名は、式子内親王を愛した藤原定家が、死後も彼女を忘れられず、ついに定家葛に生まれ変わって彼女の墓にからみついたという伝説に由来する。能の「定家」にもこの話がでてる。

定家葛の花はジャスミンに似ていて香りもいい。花のあとの実は写真のように2本の細長い袋状で、やがて裂けると白い綿毛のついた種子が風で飛んで行く。

花フジさんがこの定家葛をくださった。大切な一枝なので私の家元襲名記念の器にいった。花と器の組み合わせも気に入っている。

花材 定家葛（夾竹桃科）

水仙（彼岸花科） 赤椿（椿科）

花器 朱塗盃「富春盃」



彫刻の花器

櫻子

この花器も祖父が好んで良く、テキストで花をいけていた。

横長の平たい形だが、生花をいける事もあつたし、洋花や和花どちらも合わせていたようだ。

お稽古用の花器で、普段に使っていた。

どつしりと重いので、砂利、剣山水、花を入れると気合なくしては持ち上げられない。それほどに重い！だが安定の良い花器は安心して花もいけられるし、どんな形にも作る事が出来る。

焦茶色で菊の柄のように彫刻された図案だ。

力強いけれど、主張しすぎず、いける花の事を考えて作られた良い花器だと思う。

小豆柳、椿、臘脂菊と冬らしい静かな取り合わせだが、花器のお陰で足元がしっかり支えられて温かみも感じられ、長い間飾っておくことも出来た。

花器が美しいと花との接点も氣をつかう。

祖父も足元には焦茶色に合う綺麗な色の花を置いていた。

椿の葉が多くかかり過ぎないように、重くならないように何度もカメラのレンズを覗いた。

花材 小豆柳（柳科）
あずきやなぎ

椿（椿科）

スプレー菊（菊科）

花器 方形陶花器



立派な金魚草

櫻子

10月の関東支部いけばな展で、いろんな色の金魚草を主材にしていけておられる人がいたが、細い横長の花器の口から舞出するような金魚草が印象的だった。さて、京都の花屋でも見事な金魚草が売られていたので私もいけてみることにした。12月初旬にこんな金魚草が手に入ることを覚えておこう。

作例では黒地に銀と金で彩色された箱形の陶花器に濃赤色と純白の金魚草を立て、足元に大輪のダリアを添えて花器の口元を整えた。花器の模様を隠したくないので、ダリアを短く挿しただけで、余計な葉ものは加えていない。

金魚草で思い出すのは、「花ふたり旅」の本の中で、母がドイツのケルンでいけた花。赤色、臘脂色、オレンジ色の金魚草に白色とクリーム色のストックを混ぜていけられている。器は葉でつくられたリースでこれも又濃い臘脂色なのだが、ブロンズのミニメントの前でそれらの強烈な色彩がとてよく合っている。この感覚は流石だと思う。異国の地で限られたスケジュールの中、場所を探し、花と器を手に入れて写真に撮るのは至難の業。「花ふたり旅」は両親の宝物であり、また私たちみんなの宝物だ。両親に感謝。

花材 金魚草（胡麻葉草科）

ダリア（菊科）

花器 金銀彩箱形陶花器



耳付花器

櫻子

花器に耳が付いているのと付いていないのとは、何が違うのだろうか。

今月号には二つの耳付花器に花を付けている。どちらも絶妙なバランスで耳が付いている。見ていて飽きない。器によっては、耳が無いほうがシンプルでいいのになと思うような耳がとってつけたように付けられた器もある。器の耳は奥が深い。

耳の役割は装飾性にあると思う。耳の雰囲気器の印象を決定づけると言ってもいい。

このページの花器のように、付けられた耳がお洒落な形だと、花の取り合わせや花型も垢抜けた感じになる。また、表紙の花器のように獣の顔の耳がついていたりすると、格調高い雰囲気要求される。知らず知らずのうちに、器の耳が私たちのいる花に影響を与えているとすると、耳おそるべしだ。

というわけで、チョコレート色のカラーと深紅のレナンセラ、白い実の南京櫛なんきんはしという取り合わせには、きつとこの花器が合うと思っていけてみると、やっぱりいけ映えがする。きゅつと締まった足のくびれが、花型に動きを与えてくれている。そして腰に手を当てたような形の耳は、全体の引き締め役だ。

花材 南京櫛（燈台草科）

チョコレート色のカラー（里芋科）

レナンセラ（蘭科）

ミリオクラダス（百合科）

花器 耳付陶コンポート（宇野仁松作）



出合い花（4）

仙溪

バンドと金豆

花屋で可愛い黄色の実を見つけた。小さな鉢植で売られていたが、名前は「金豆（キンズ）」となっている。

調べると和名はマメキンカンで、別名としてキンズ、又はヒメキンカンと呼ばれているそうだ。

蜜柑科・金柑属の常緑低木で原産地は中国。食用にはならず、盆栽などの観賞用に栽培されている。やはり枝には棘がある。

今月号には表紙にも蜜柑科・蜜柑属の仏手柑をいけている。こちらも鉢植から切ったのだが、仏手柑の棘は強烈なので注意のこと。下手をすると手に穴が開く。

さて、出合い花。金豆1本に何を取り合わせようか。花屋を見てまわってこのバンドに決めた。直感である。いけてみてやはりよく合っていると思う。紫色のバンドは仏手柑との相性もいい。反対色の取り合わせが互いの色を引き立て合うのだろう。

バンドは東南アジアを中心として中国南部・オーストラリアにおよそ60種が分布する蘭の仲間。樹木や岩肌に根を張り付かせて伸びる。名前はサンスクリット語で「着生する・まとわりつく」と言う意味の「バンドカ」に由来する。

まとわりついたり、からみついたり、植物たちも大変だが、人間も含めて自然はもともと複雑にからまりあつてあると思えば、様々な出合いでこの世は成り立っているとも言える。次なる出合いは。

花材 バンド（蘭科） 金豆（蜜柑科）

花器 珠形陶花瓶（宇野仁松作）

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2015 年
1 月号
No.619

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



謹 賀 新 年

平成二十七年 元日





感受性

仙溪

いけばなと料理の共通点はいろいろあるが、自身の感受性を豊かにさせるという点も大きい。櫻子によれば、料理を続けていると、しだいに食材や調味料の特性がわかるようになり、それらを生かす工夫ができるようになってくるし、いけばなも一緒よ、とのこと。

なんでもそうだが、気持ちを込めて何度も何度も続けていると、はじめはできなかったこと、わからなかったことが、できるようになり、わかるようになってくる。自分という器が、だんだんと豊かになってゆく感覚といってもいい。

いけばなや料理は感受性を豊かにさせてくれる上に、まわりの人もしあわせにすることができる。美味しい料理や心のこもったいけばなは、「和み」を生んでくれる。

そんな花や料理がつくれるようになると、自然に「大切なものは何か」も見えてくるんじゃないかと思っている。季節のうつろいを肌で感じながら、ささやかでも、その時季の花や食材を味わうことがとても豊かなことなんだということもわかってくる。

ただお腹がふくればいいのか、なんでもいいから生けておけというのではなくて、一手間を惜しまない暮らしを心がけたい。

鳳凰の舞い降りる木

仙溪

子供の頃は祖父母と住んでいたこともあり、正月には親戚が大勢やってきた。父や伯父たちは「おいちよかぶ」や「はなふだ」で遊んでいた記憶がある。花札の絵柄には季節の花や動物が描かれているが、その中の一つに「桐に鳳凰」というのがある。



鳳凰は中国に伝わる四つの霊獣（四霊）、すなわち麒麟、鳳凰、霊亀、応龍の一つで、平安のシンボルとされている。ちなみに麒麟は信義、霊亀は吉兆を予知し、応龍は変幻を表す。

平安を表す鳳凰は霊泉のみを呑み、竹の実のみを食べ、梧桐の木にしか留まらない。この梧桐はアオギリのことだが、古代の日本でいつしかキリに置きかえられたらしい。アオギリの花は白くて繊細、キリの花は紫色で力強く上に立つ。

作例で桐のつばみにとり合わせた菊は、「シェイク」という名の新品種で、ドーナツのような不思議な形をしている。ピンクのピンポン菊とともに鳳凰を連想するに相応しい玄妙な美しさを感じていけてみた。伸びやかな葉の広がりを生かして、十分な奥行きをつくってつけている。皆さんの平安を祈って。

花材 桐（胡麻の葉草科） 菊三種（菊科）
花器 黒色釉水盤



冬の彩り

△表紙の花▽ 櫻子

葉牡丹は冬の花壇も彩るアブラナ科の植物でキャベツの仲間だ。ヨーロッパ原産の「ケールズ」と呼ばれる結球にならないキャベツが祖先である。中心の葉の色がピンク→白→グリーンと変化し、まるで薔薇の花のよう。春先には黄色の花が咲くのだが、葉だけで充分美しい。お正月は松や梅の足元に押し込められて窮屈そうに飾られている葉牡丹が気の毒だが、私はいつもスイートピーやチューリップと飾りたいと思う。今年は切れ葉で縮緬状の葉牡丹を多く見かけた。山羊型のトルコ水差しにもとてもよく似合う。

花材 葉牡丹（油菜科）

オンシジウム（蘭科）

スイートピー（豆科）

花器 山羊型陶水差し（トルコ製）



森の宝石

△2頁の花▽ 櫻子

バンダも、エピデンドラムも蘭の中ではとても好きで良くいけさせて頂いている。昨年秋季の日本いけばな芸術展では根付きのバンダをコウモリ蘭に絡ませた。バンダという名前は「まとわりつく」という意味なので木や枯れた羊歯に絡みつくようにいけるのも違和感がなかった。根はとても空気を好む性質なので、霧を少し吹く程度で乾燥した会場でも元気で有り難かった。エピデンドラムはカトレアの近縁種でエビ（上）とデンドロン（樹木）で樹の上に着生するという意味になる。エピデンドラムもバンダも野生の姿を見た事はないが、名前から読み取れる雰囲気大切にしている。

花材 エピデンドラム（蘭科）

バンダ（蘭科）

カーネーション（撫子科）

花器 洋陶器（ローゼンタール）



花の進歩

△3頁の花▽ 櫻子

紅葉のヒペリカムが珍しくてピンクカラー、赤薔薇と取り合わせた。昨年の11月下旬の花である。赤薔薇は一輪だけ。それで充分なくらい花も茎も葉もしっかりしていて、ヒペリカムの紅葉に負けていない。本数が少なくても花の向きを考えていけると良い。秋の日本いけばな芸術展でも横田慶重先生がいけられた花は、仏手柑に三本の赤薔薇と胡蝶蘭を取りあわせておられた。昔の赤薔薇なら10本はいけないと強さがなかったが、今の赤薔薇は強く丈夫で栽培技術の進歩に驚くばかりである。

花材 ヒペリカム（弟切草科）

カラー（里芋科）

薔薇（薔薇科）

花器 陶コンポート（前田保則作）



立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ⑧

立花秘傳抄 四 (前号の続き)

立花細工の事

或人の云、立花は山木野草のおのづからなる景氣を瓶にうつすを至極とす。然るに木をねぢ、草をためて立てる事いかがぞや。されば木をねぢ、草をたむるは、おのづからなるすがたをうつさんがため也。細工をしても細工と見えざるようにする時は、細工にあらず。

ゆがみたる見木を直になさんと思わば、内より鋸にて七分切り、三分残してくさびをかふ時は、曲がりたるものもすぐになり、すぐなる物も曲がるなり。木のおれやすき物は、火にあぶりてせんをかふべし。

心の除のききわより込入りまでを、節もゆがみもなきように能よくけづるべし。正心、副、請、流枝、控枝、同前に削りて、少しもすぎまなきように立て合わせる時は、花きれいに出来、かこいも入れず、水ぎわもほそくなりて、下草自由につ

かわるる物なり。

松の葉はふのりを引き、わらにてまきて、葉をふせ遣うといえどさのみ好まず。

明日の花ならば、松、いぶき、黄楊、枇杷などは、葉も見木も一夜水につけて用いる時は葉色かわらず。



見木に枯れ枝、節など有るとも、あまりきれいにけづるべからず。出生の景氣ようすうするなり。

万の小枝は油火にてやき、ねぢたためにして水へ入れて能くひやす。あたたまり有る時は、ためもどる也。

草のやわらかにほそきをたむるは、心をしづめ手の内にてたむる。心いそぐ時は、かならず折るなり。

晒木、常は瓦の屋根に置くべし。苔は板家の日影に置くべし。少しの間は紙にて巻き置くべし。晒木色のあしくなるは、あくを煎して洗い、炎天にほすべし。

松のつぎめ見ゆる時は、松やにをもつてつくろい、又蠟にてもつくろう。又松の葉あくなさんと思わば、すおうをせんじて染めるといえど、さのみ好むべからず。

針金をやわらかになさんとおもわば火に入れてやくべし、それをまたかたくなさんと思わば小刀のむねにてしごくべし。

草木水あぐる事

蓮、こうほね、水あおいは茎を結び置いてその下より切るべし。

紫藤は夜半に切つて水深くいけ置くべし。又藤は切るとそのまま遣うべき葉ばかりをのこし、残りはもぎていくるなり。又根をたたきひしぎて酒につくる。白藤は水あげやすし。花、物にさわれば色あしくなるなり。

竹ほそきは早く枯れる。三年四年竹をよしとす。又切つて根をやくべし。又上の節をぬきて水を入れる。笹しおれたる時は酒を吹く。

竹草は夕に切つてよし。仙翁花、雁緋は日盛ひさかりに切つてよし。水をかくればかえつてしおる。一切の花、充分に開きたらば水をはなして箱に入れてよし。杜若、芍薬、菊など五里十里の遠方へ遣わずに、箱に入れてよし。水木、梅もどきは、切つてはやく葉をとらざれば実しおるなり。室咲きの花のたぐいかならず水をかくべからず。

花瓶の事

瓶は仏在世に舍利仏、土器を二つ取り合わせ、諸花を生けたる故、瓶の字、瓦に併せると書くと言えり。

花瓶図を考えるに、唐に花瓶と名付くる物なし。今日本に用いる所、唐の酒器なり。古代は花形ちいさきゆえに、瓶もちいさく、近代は花おおきなれば瓶も又大きなり。込入りのふときを用ゆれば、水ぎわほそく指しよきなり。

古代より耳口、菱、角花瓶のあしらいとて、角又は耳の上へ下草を出しかくす事を嫌うなり。

草の心には花瓶ちいさく、木の心には大きなるを用うべし。

夏の花には瓶に水うつ事有り。但し地文あるにはうつべからず。

貴人より花瓶出さるる時、焼き物又はから物ならばふとき心、おもき晒木苔を用うべからず。花もかろく立てる。是を花瓶あしらいと云う。耳のなき角花瓶ならば、角を前へ取るべし。



床に花台をなおさば、前後は畳の目をかぞえ、横はたたみの筋を見合う。真中は懸物の折釘を、定法にして花台をなおし、さて花瓶をおくべし。近代は花瓶風流をつくす。古代は瓶に景多き時は、花に心うすしとて地紋あるだに是を嫌う。誠に花に大切なる心、さもあるべき事なり。



石化柳 薔薇

仙溪

花形 草型 副流し 二種挿し
花器 陶コンポート (柳原睦夫)
陶芸作家、柳原睦夫さんの作る器はとてもモダンで、そのため普段はいける機会を失っているが、ここぞという時のためにとっている。石化柳に菊や椿の根締めなら自然調の器を選ぶが、深紅の薔薇を選んだので、この器にした。



レモンちゃんを手なずける副家元と、レモン師匠の〇〇の家元。



水仙一色

仙溪

花形 立花 真の花形
花器 陶花器

立花研修会で立てた直真の水仙一色立花。九つの役枝だけで、やや小振りに立てた。受筒は著我の葉で隠している。

あしらいの葉を加えて、もっと厚みのある花形にするなら青銅の立花瓶を選ぶところだが、素朴で身近な立花なので、オランダの陶芸家からいただいた焼き物の器を選んだ。

ザールバークさんとは一九八八年にドイツでお会いして以来のおつきあい。ジョージ・デビッドソンのキクスクールいけばな合宿特別講師として家族みんなで行ったときに、生徒さんのいける器のほとんどは彼がつくったものだった。

父の立花が好きだったデビッドソンさん。彼女のいけばなを支えたザールバークさんも古典花に関心が強く、その水際の美しさもよく理解されている。数年前に奥様と日本に來られた時に、この器をいただいた。毎月テキストを贈呈しているので、喜んでいただけたと思う。



赤芽柳 椿

仙溪

花形 行型 二種挿し
花器 銅器

右ページの立花の器とは対照的な銅製の器。十三世の「専溪生花百事」の中では、金茶の二輪菊を草型留流しに付けておられる。中国古代の祭器に見られるような装飾が施されていて環の耳がついている。テキストでもめつたに使ったことのない器だが、力強い赤芽柳を受け止めてくれる器を考えたときに、ふとこの器を思い出した。

今号の「立華時勢粧」解説で、「花瓶の事」の中に「貴人より花瓶出さるる時、焼き物又はから物ならはふとき心、おもき晒木苔を用うべからず。花もかくく立てる。是を花瓶あしらいと云う」とある。貴人の器は大切に扱うべしという戒めと、器と花材の調和（軽重、品格などをそろえる）に配慮せよとの教えである。他にも興味深いことが書かれている。

根締めを選んだ椿の色が気に入っている。数椿ほど濃くはなく、西王母ほど薄くない、ちょうど頃合いの色が、赤芽柳の赤色と黒々とした銅器の色のつなぎ役にぴったりだ。

器と花材の選択はとても奥が深い。いろいろと試してみながら、お気に入りの組み合わせを、自分の引き出しにしまつてゆけばいい。



出合い花（16）

仙溪

千両

シクラメン

いけばなの素晴らしいところの一つは、季節の輝きを身近に楽しめることだ。出合い花をいけるようになって、あらためて小さな花の輝きに気付くことが多くなった。

写真のシクラメンには「シューティンダ・スター」という名前がつけられている。珍しい品種なので値段もそれなりのものだったが、鉢は陶器の深鉢に入れてダイニングに飾って楽しみ、時々花と葉を切っていけて二重に楽しんでいる。

大輪で花茎も長いので、小さな器ならそのままいけることができるけれど、新春の出合い花でもあるので、竹ひごと小枝を使って、器から立ち上がるようにしてみた。どのようにしてあるかはご想像ください。

シクラメンは桜草科・シクラメン属の多年草で、花期は秋から春。地中海沿岸の涼しい雨期に咲く花だ。名前は「螺旋」に由来するが、これは受粉後の花茎がぜんまいのようにくるくると丸くなるところから。花弁は蝶が舞っているようにも見える。

千両は庭から小枝を一枝切っていった。千両科・千両属の常緑小低木で東アジアからインドに分布する。赤い実が喜ばれ、また縁起がいい名前なので正月の大切な花材になっている。

日本の冬を彩る和洋の組みあわせ。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2016 年
1 月号
No.631

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



謹 賀 新 年

平成二十八年 元日





二〇一六年・平成二八年
丙申（ひのえさる）

今年は申年だが、十干十二支で云うと「丙申（ひのえさる）」にあたる。十干と十二支の字の中には万物の榮枯盛衰の象が内蔵されていて、「丙」は「炳らか」で草木が伸長して、その形態が著明になった状態」という意味がある。

また「申」は「呻く」で「万物が成熟して締めつけられ、固まってゆく状態」という意味がある。

「万物の榮枯盛衰の象」と云うと難しいが、樹木の成長に例えるとわかりやすい。

まず種子の内部に新しい生命が萌し始める。やがて伸び広がり、茂ってゆく。成熟をむかえたのちに、だんだんと衰微へと向い凋落するが、ちゃんと新しい生命を種子に宿している。それを何度も繰り返して大きく成長し、やがては次の代へバトンタッチということになる。

その過程を「甲乙丙丁戊己庚辛壬癸」の十干と「子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥」の十二支に置きかえてあるわけだ。なるほど。

さて「丙申」の意味は「形が明らかになる」と「成熟して固まってゆく」だが、自分のことに置きかえてみて、形になりつつあるもの、実を結びつつあるものを探してみよう。この一年に、それらを形にし、実を結ぶことができますように。



五葉松の立花

△4頁の花▽

仙溪

冬から早春へ向かう季節の立花。行の花形で、基本通りの役枝の配置に立てているが、真の重心が中心からはずれているので、流枝を大きくして真とバランスをとっている。細枝にまで苔のついた梅は、なんともいえない味がある。この立花の格を上げてくれている。

花材 五葉松（松科）

松（松科）

梅擬（繭の木科）

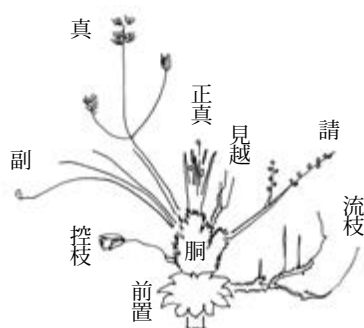
赤芽柳（柳科）

紅梅（薔薇科）

白椿・数椿（椿科）

水仙（彼岸花科）ほか

花器 陶花瓶（市川博一作）





水仙に寒菊

△表紙の花▽

仙溪

父はよく水仙一色の立花に、寒菊の前置を好んで加えていた。寒さで紅葉した葉色の上品な美しさと、寒中に咲く健気な黄色い花が、水仙の相手に相応しいと感じていたのだろう。精緻に編まれた花籠に寒木瓜と共に水仙と寒菊をいけた。寒菊は下品にいたらあかんと母が云っていたのを思い出す。花の持つ品格を引き出した。

花材 寒木瓜（薔薇科） 水仙（彼岸花科）

寒菊（菊科）

花器 花籠（公長斎小菅）



横から見た奥行き



若松

千両

△2頁の花▽

仙溪

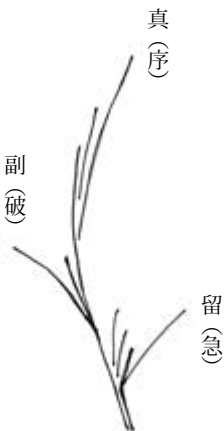
昨年の「富春軒初春の会」に花手前でいけた生花である。お正月花の生け直しの参考にしていただいてはどうだろう。若松の生花は7本の枝でいけるが、留と控の2本をはずし、代わりに千両を入れている。千両は黄美でもいい。丁度いい長さの横枝を利用するのが意外と難しい。松とのバランスを考えて、総開、留の沈みにも入れている。

花型 真型 一種挿し

花材 若松（松科）

千両（千両科）

花器 青竹竹筒（9寸）



真（序）

留（急）

副（破）



新春の彩り

△3頁の花▽

櫻子

こんなに大きな仏手柑をいけるのははじめてだ。家元に頼んだら丈夫な枯れ枝に乗せる形で花器にとめてくれた。びくともしない。仏手柑は文人的ないけ方が多いけれど、私は明るくモダンにいたたく。3色のバンダと白椿の組み合わせで、新春の彩りを。

花材 バンダ3色（蘭科）

仏手柑（蜜柑科）

白玉椿（椿科）

花器 陶コンポート（柳原睦夫作）



横から見た奥行き

立花秘傳抄 五

立花名目 並びに 訓解 (つづき)

かこいの事

立花のかこいと云うは、たとえば屏風障子に見苦しき所をかこえば、そのまま花やかになるがごとし。さるによりて上手は松、ひおうぎを好まずして、美花美葉をもつてかこう時は、かこいすなわ則ち美景となりて、花あつく見所多し。然るに初心の内は、間あきをふさぎかね、かこいこころたい意ばかりにて景をとるの修練なし。上手になりては、わざと間あきを好みて一景を指し出す。よくよく意をつくべし。

前にてかこう花あり。後ろにてかこう花あり。前にてかこうと云うは、まず胴、前置を前へはらせ、美花美葉のあざやかなるをもつて、胴の左右、請、控枝の前にしげく立てる時は、花丸く胴あつくなりておのづから後ろにかこいいらざ

るなり。また後ろにてかこうと云うは、前に下草すくなく、花葉左右へ出いでず、胴作り立てばそなる時は、後ろにて下草しげく遣いて、景をとるといへども見所すくなし。

谷洞たにほらの事

立花の谷と云うは胴作りの後ろ、正心の前くつろぎて、奥深きところあるをいうなり。谷はうつろと読ませて、木陰くらく幽なる所を云うなれば、美花美葉のあざやかなるを少し沈ませ、遠くかまえて見込みしおらしく立てるなり。

洞というは、流枝と前置の間ゆるやかに、上より下草なびき、奥もの深きところなり。水ぎわ一方せまりたる時は、一方かならず洞をかまえ、しおらしき花などかすかなる様に立てるなり。

つや 並びに あしらいの事

つやと云うは、幹太くこわごわしき物には美

花美葉のやわらかなる物を外よりそえ、又は内よりたよらせて立てる時は、するどなるものもやわからか見え、けやけきものもいやしからず見ゆるなり。これ立花第一の教えなり。あしらいと云うは、葉のなきものには葉ある物を取り合い、丸きものにはほそきもの、かるきものにはおもき物、かたき物にはやわらかなる物、きおいたる物にはなびきたる物、すぐなる物にはまがりたるもの、この外あまたあるべし。

古代は七つの枝の外を皆あしらいと名付く。初心は一草をもつてつやとし、一木をもつてあしらいとす。巧者にいたりては、一草をもつてつやあしらいの二つをかね用いるなり。

意気の事 並びに うつりの事

意気と云うは、心を勢いあるように立て、そのうつりを請によくうつし、両方へ楽に張り合ひ、竜虎の如くなるを云う。これ上は心請より、下は水ぎわに至るまで、この心得をもつて指す

なり。師語をもつて教う。意気あるは則ち意気に添う。うつりと云うは、一方に曲がりたる物を立て、一方にはそのうつりを請けて直なる物を立てる。意気うつり同じ意なり。

張弛の事

張弛とは、草木地より発生して、勢いつよき姿を云うなり。一草一木、一花一葉の上にてこれを云わば、魚の池に躍るがごとし。草木花葉対用してこれをいわば、波岸に当て立てるがごとし、よくよく修練してこの位を指し得るを名人と云うべし。

立花色の事

師に問う。立花色と云うはいかなる所を云うや。師の曰く、これ花道の奥義、出生玄妙体を瓶にうつすを仮に名付けて色と云う。その玄妙体とはいかなる所を云うや。師の曰く、柳は緑、花は紅。問うて曰く、いかがして指し得べきや。師語りて曰く、草木我が心にまかする時は工に

貪著するゆえ、必ず出生の景气得がたし。また我が心草木にまかせて念慮なく、植に生ずるは植に、横に生ずるは横に遣う時は、草木自然の体、顕なるべし。藁駝曰く、古文「以能順木の天以致其性焉爾（以て能く木の天に順ひて、

以て其の性を致すのみ）」この語花道の奥義によく相叶えり。誠に微細の教導、向上の一路なり。この境をよくよく工夫して修練止まざるときは、覚えずして色あるべし。





基本花型にいける

〈9頁の花〉 仙溪

主材 ユーカリ (フトモモ科)

副材 ストック (油菜科)

スプレー菊 (菊科)

花器 粉引陶水盤 (伊藤典哲作)

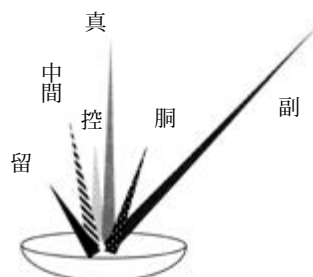
ユーカリのシルバークレーの葉色には鮮やかな色の花がよく似合う。スプレー菊のワインレッドとストックの淡いピンクが、ユーカリを背景にしてモダンに鮮やかに見える。

花型は斜体副主型を選び、ユーカリの長い枝が副の位置に伸びて。真副、胴にユーカリが広がる感じにしている。

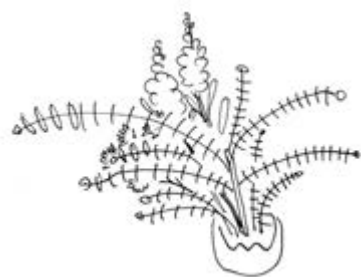
ユーカリの次にストック、スプレー菊の順に入れていく。その時じやまになる小枝は切っておき、最後に水ぎわや奥行きを加える。ストックの足元にも小枝をさして温かな感じにしておくといい。



斜体副主型 (逆勝手)



横から見たところ





紫葉アカシア

△10頁の花▽ 仙溪

枝先の葉が紫色になるアカシアが、花以外の時季に切り枝で売られるようになった。微妙な色あいが写真では分かりにくい、金属的な深い輝きは冬のいけばなに独特の深みを与えてくれる。

花材 紫葉アカシア（豆科）

アイリス（彼岸花科）

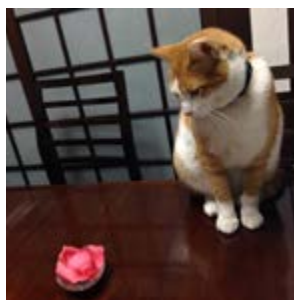
薔薇（薔薇科）

花器 洋陶スーパ鍋

横から見た、いけばなの奥行き。



レモンちゃんと椿





カトレア

〈11頁の花〉

櫻子

徳島県の蘭栽培園からカトレアをいただいた。カトレアは栽培が難しく、また切り花は花だけが切られるのでとても短く、いけるのはカトレアホルダーが必要となる。

いただいたカトレアはバルブ（親茎）つきで立派な葉もついている。大変貴重なものなのだ。

カトレアの色が映えるように、濃紺のガラス花瓶と南京櫛の白い実を選んだ。

見事な大輪の鮮やかさは、まさしく蘭の女王だ。

花材 南京櫛（燈台草科）

カトレア（蘭科）

ミリオクラダス

（百合科）

花器 濃紺ガラス花瓶

（コスタボタ製）

横から見た奥行き



陰陽五行

原初、宇宙は「混沌」たる状態であつたが、その中から「陽」の気が上昇して「天」となり、次に「陰」の気が下降して「地」となった。この陰陽の二つの気は、元来が混沌という一気から派生したもので、いわば同根の間柄であり、ゆえに互いに引き合い、親密に往来し、交換・交合する。この

- ・ 天地同根
- ・ 天地往来
- ・ 天地交合

の三つが陰陽五行の根本原理になっている。

この根本原理を云いかえるとこういうことだろうか。もともとぐちゃぐちゃに混ざり合つた澱んだ状態であつたものが二つに分かれた。一つは「陽」の性質をもち、一つは「陰」の性質をもつものである。そうするとそこに、それら二つの相反するものの間を巡る流れが生じて、活発な循環が行われるようになった。さらにはこの両極のものが交わることで新たなものを生み出すことにもなった。

なんとなくイメージできただろうか。現実には置きかえれば、動物も植物もその命はこの両極の交わりによつて生まれ、この両極を巡る流れがその命を育み活発にさせている。そしてその両極の根は一つ。ふむ。次回はこの両極の性質、陰と陽について掘り下げてみよう。



出逢い花（26）

仙溪

桐（桐科）

薔薇（薔薇科）

黄な粉をまぶしたように見える暖かそうな桐の蕾が好きだ。春には高貴な紫色の花がこの中から生まれ出てくるのだから、自然のなんと不思議なことだろう。この蕾たちの子守役に深紅の薔薇を添えた。

花器 金箔散らし漆花器

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2017 年
1 月号
No.643

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



謹 賀 新 年

平成二十九年 元日





二〇一七年・平成二九年
丁酉（ひのととり）

今年は酉年。十干十二支（じゅうかんじふにし）
の干支で云うと「丁酉（ひのととり）」
にあたる。

「丁」は草木の形態の充実した状
態。登達の最終段階。

「酉」は果実が成熟の極限に達し
た状態。また酒樽の中で酒が発酵し、
熟し、成る様を表している。

このような解釈から、今年は機運
が熟して新たな勢力が発し、革命の
岐路となると解説する人もある。

古代の中国で考えられた「干支」
は、植物の成長の過程を十と十二の
字で表し、その六十の組みあわせで
できている。

植物は種子から芽を出し、太陽に
向かって伸び、枝を広げ葉を茂らせ、
花を咲かせて実をむすび、種に新た
な未来を託す。人はもちろんのこと、
時代の流れも植物の営みに似た変化
を繰り返しているのだろうか。

そういえば竹の花は六十年に一度
咲くという。干支の数と同じだ。

先人達は自然から多くの事を学ん
できたが、私達はその多くを忘れて
しまっていないだろうか。それらを
未来へ引き継げるだろうか。

自然の恵みに感謝し、自然を尊ぶ
気持を伝え、健やかな心を育む仕事
をしたいと、年頭にあたって気持を
新たにしている。



黒芽柳 チューリップ

仙溪

花型 二瓶飾り

花材・花器

主瓶

黒芽柳 (柳科)

煤竹竹筒

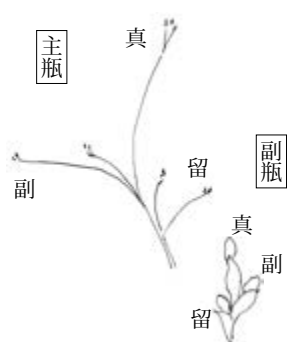
副瓶

チューリップ (百合科)

結晶釉小水盤 (前田保則作)

黒芽柳は地味な花材だが、赤味を帯びた黒い花穂は個性的で、飴色の木肌にも品が有り、枝も素直で扱いやすい。生花にいけるなら赤椿を根締めにして和の雰囲気にとめるか、色鮮やかなチューリップと株分けや二瓶飾りにして、モダンな対比を楽しむことが多い。

作例では黄色のチューリップを静かな風情にいか、黒芽柳に動きを与えている。チューリップの花色からは春の訪れが感じられ、馥郁とした葉は全体の瑞々しさを補ってくれる。





出逢い花 (27)

△表紙の花▽

仙溪

ピナス (松科)

パンジー (すみれ科)

花器 陶製にわとり 紫釉陶酒杯 ラフィア

24年前に両親が買ってきた陶の鶏。派手な色使いで装飾されているけれど、品があるので床飾りにもなる。同じ質感のぐい呑みをラフィア椰子の紐を使って背負わせ、イタリアカかさ松(ピナス)の若木とパンジーをいけた。臘脂色のラフィアを束ねて、鶏と器の隙間を埋めている。

動物の置物に花を背負わせるのはこれが2度目になる。なぜこんなふうにいけたか自分でも分からないのだが、今回も気に入っている。外国の松の優しさ。パンジーの色と表情。一体となったフォルム。偶然が生んだいけばな。

命を漲らせて、鶏鳴がとどろく。

新しい年のはじまりを祝おう。



万年青の生花

△2頁の花▽

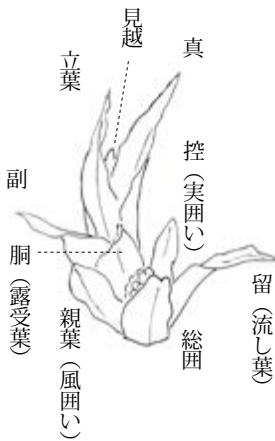
仙溪

花型 九葉一果

花材 万年青「残雪」(百合科)

花器 黒色釉水盤

はじめていけた品種で「残雪」という名前がついていた。大型の万年青で葉に白い斑が霜降り状に入っている。大変珍しい品種のようだ。昨年の新年に立花の前置にいけた後、生花にいけなおして2ヶ月間飾っていた。なんともいえない風格を感じる。



若松 木瓜 菊

△3頁の花▽

仙溪

花材 若松(松科) 木瓜(薔薇科)

洋菊(菊科)

花器 煙紋黒釉水盤(矢野款一作)

若松のみどりは初春を言祝ぐのになんと相応しいのだろう。こんなに生命力に溢れた枝をつくることができる日本の文化に、感謝せずにはおられない。

松と相性のいい朱木瓜と、乙女のような薄紅色の洋菊を合わせると、若松の凛々しさが際立った。



横から見た奥行き

立花秘傳抄 一

常磐木之部 (つつき)
ときわぎ

一木二生と云うは晒木を一本遣つて、一方は松、一方は伊吹と付け分ける事を嫌う。松ばかりか、伊吹一色ばかりにてはよし。



一生二木と云うは苔木と晒木とを両方に遣つて、伊吹一色にて生を付けるを嫌う。一方はまた松なれば苦しからず。



苔木晒木に生を付けるに真行草の三段あり。前より付けるを真と云い、後より付けるを行と云い、脇より付けるを草と云う。

前に円栢いんぱきあり、後に松あり。中に晒木をはさむ時は、前の円栢の晒木になるなり。生木は体なり、晒は用なり、体用と次第するゆえなり。是を真の付けようと云う。又後の松の晒木なさんとと思わば、円栢と晒木との間を草にて立きるべし。



前に黄楊ワウヤウてり葉などの苔晒木の付かぬ物ある時は、後の松の苔になるなり。是を行の付けようと云う。



請に松を立て、控枝に晒木をつかうに、正心に晒木の付くべき物なく、又ほかにうばうべき木なき時は、請の晒木となるなり。是古来の法式なり。



苔木晒木をうばうと云うは、苔木にても晒木にてもあれ、一本立てる時、松にも縁ちかく、

いぶきにも縁ちかき時は、この晒木を両方より
うばうとて大きに嫌うなり。松ならば松、栢樹
ならば栢樹と、よく立て分けるをよしとす。



立花に苔木晒木のふときを好まず。細きは長
く、太きは短く遣いて、いやしからぬを専らとす。
水際にきれいに、細工見えぬをよしとす。

※参考文献

『いけばな美術名作集 第三卷 立華時勢粧』
(日本華道社刊)

『花道古書集成 第一期第二卷』

(大日本華道界刊 思文閣出版刊)

※立花図転載

『華道古典名作選集 立華時勢粧』

(思文閣出版刊)



第六十七図

二株砂物 伊吹真

中野五郎左衛門

伊吹 晒 松 苔 杜若 百合

小羊園 栢植 要 檜扇



トートムボール的に

仙溪

花材 バーゼリア（ブルニア科）
 アンスリウム（里芋科）
 プロテア・コルダータ
 （ヤマモガシ科）
 花器 鍵穴型陶花器

バーゼリアの小枝の表情が気に入ったので小さいければならなかった。濃赤色のアンスリウムと、足元には小さな葉物を一本。ハート形の葉をもつプロテア・コルダータは、南アフリカでは「愛の葉」と呼ばれるそうだ。長さが短く、腰が無いので扱いにくい花材だが、この小さいければならぬ丁度あっている。

バーゼリアも南アフリカの植物。副材としていけると地味な花材だが、足をつけることで高く立てると、主役になって存在感が増す。

3種類の花材を、積み重ねるようにいけてみた。前から見ると、花器の形も含めてトートムボールのようだ。異国の花の精霊が、静かに語りかけてくる。

横から見た奥行き





赤いメラレウカ

桜子

花材 メラレウカ（フトモモ科）

ダリア2種（菊科）

花器 白地黒絵陶壺（森俊山作）

11月号では黄色のメラレウカに濃いオレンジ色のダリアを合わせている。日持ちがして香りもいい。色も鮮やかで、これから人気がでるだろうなと思っていたら、今度は赤いメラレウカが出てきた。

赤い葉は枝先だけなので、赤と緑が混じった感じ。若い葉が寒さで赤く色づくのだろうか。そういえばオタフクナンテンも常緑の葉が冬の間は赤く色付く不思議な木。この赤色のメラレウカも冬のいけばなに向いている。

今回は優しいピンク色の大輪ダリアを選び、赤いポンポン咲きを一本効かせてみた。モノトーンの広口壺に付けて朱塗りの敷板に置くと、花の品格が鮮やかに映える。

横から見た奥行き





ハート形のユーカリ

櫻子

花材 ユーカリ・ポボラス
(フトモモ科)

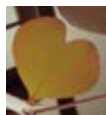
アメリカネス(彼岸花科)

スイートピー(豆科)

花器 白条文陶花瓶(宮下善爾作)

このユーカリは葉が枝から少し離れたところについているので軽やかに見える。生まれたての葉は赤味が残り、暖かみを感じられる。

ユーカリ・ポボラスと呼ばれている。葉はおよそ丸形だが、希にハート形のものも混じっている。とても可愛らしい。



とり合わせたアメリカネスは初めて見る花材で、アマリリスとネリネの交配種。エクアドルからの輸入だそう。薄紫色のスイートピーと合わせると、優しい色の変化が楽しめる。器と敷物はユーカリの赤葉に合わせて選んだ。

横から見た奥行き





庭の千両

櫻子

花材 アスコ（蘭科）

千両（千両科）

黄実千両（千両科）

花器 結晶釉花器（前田五雲作）

家の庭には赤と黄色のセンリョウがある。2年前に植えたのが少しすっかりしてきたようで、実がついたのが嬉しくて、惜しいけれど、小枝を切ってオレンジ色の蘭といけた。アスコと呼ばれるランには葉がついていないので、艶やかなセンリョウの葉がよく似合う。

雪の結晶がちりばめられたような一輪挿し。オーロラのように輝いて、いつまでも眺めていたくなる。

レモンとみかん

なんかへんだにゃ・・・



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2018 年
1 月号
No. 655

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



謹 賀 新 年

平成三十年 元日





二〇一八年・平成三十年
戊戌（つちのえいぬ）

今年（いぬどし）は戊戌年（じつかんじゅうにじ）
「戊戌（つちのえいぬ）」にあたる。

「戌（いぬ）」は十干の5番目にあたり、
植物の成長に例えるなら勢いよく葉
が茂る様子を表し、繁栄を意味して
いる。

「戌（いぬ）」は十二支の11番目にあたり、
枯れた木を表し、終焉、滅亡、終わ
りを意味する。

栄えあり、滅びあり。世の中に大
きな変化があるともとれるが、良い
方へ向かうことを願う。

以前、家族皆で中国へ行つたと
き、上海の城隍廟に六十体の干支
の木像があつたのを思い出す。そも
そも「干支」は「黄帝、大撓をして
甲子をつくらしむ」と「漢書」にあ
り、BC3500年頃生み出されたとさ
れる。やがて日を数えるのに使われ
ていたものが、漢の武帝の頃より年
に割り当てられるようになった。

生命の成長過程を10段階と12段階
の文字に表して組みあわせ、さらに
陰陽と五行「木火土金水」が加味さ
れた60の「干支（えと）」には、私達人間も
含めた生命の営みが、生き生きと幾
久しく続くように、との願いがこめ
られているように思う。

「戊戌」と名付けられた今年一年、
まずは心と体が健やかでありますよ
うにと願っている。



ソロバンノキ 櫻子

花材 青文字 (楠科)

チューリップ3種 (百合科)

花器 陶鉢

別名シヨウガノキ、ソロバンノキとも呼ばれるアオモジ。クスノキ科の落葉小高木で、昔からあるいけばな花材として秋頃から花屋に並ぶ。そのせいか、緑のつぼつぷを実だと思っている人が多い。桐や猫柳と同じ花の蕾なのだが。

淡緑色の苞に数個の蕾が包まれている。だんだん大きくなって、やがて苞が割れて蕾が顔を出す。暖かい部屋なら白い花が咲くこともある。真冬にわざわざチューリップをいけなくてもよいと思うが、春を待つアオモジと取り合わせたくなった。木肌がうす汚れた緑色なので、いける時は幹を隠し蕾を目立たせたい。最近お菓子の楊枝も黒文字よりも青文字の方が多くようだ。キリツとしたこげ茶色の楊枝で和菓子を頂きたいのだが。



横から見た奥行き



清々しい翠 みどり

〈表紙の花〉

仙溪

花材 枝若松（松科）

シンピジウム（蘭科）

千両（千両科）

花器 紫紅彩陶花器（幾左田昌宏作）

ワカマツ3本、ラン1本、センリョウ1本のお正月花。紫色の釉葉が美しい花器に、底に置いた剣山に松と蘭をさし、千両は投入でいけた。上品でおちついた雅を感じるいけばなになった。器の色と形で花の雰囲気がいふんと違ってくる。螺鈿ちやうでんの入った敷板がうまく合ってくれた。



横から見た奥行き



寿松 ことぶきまつ

〈2頁の花〉

仙溪

花材 寿松（松科）

エビデンドラム（蘭科）

白玉椿（椿科）

花器 耳付陶花瓶（宇野仁松作）

コトブキマツと名の付いた根付き松。短くて濃緑の丈夫な葉が密生している。こんもりした感じ、独特の風情を感じる。鮮やかな色の蘭を合わせると、特別感が増してくる。寿松はキリッと立てて、エビデンドラムはしなやかな動きを出した。西洋的な色と形の器が似合う。白玉椿はつなぎ役。



横から見た奥行き



日の出

〈3頁の花〉

櫻子

花材 南天（目木科）

オンシジウム（蘭科）

アイリス（菖蒲科）

花器 舟形陶花器（宇野仁松作）

山で、海で、初日の出を拝まれた方も多かったのではないだろうか。新春を言祝ぎ、お日様への感謝をこめて。日の光が世界を照らし、温もりが届きますように。アイリス（虹）の彩りを加えて。



横から見た奥行き

立花秘傳抄 二

通用物之部 (つづき)

竹

祝言。上中。

竹の字、形かたちに象かたどりてこれを作る。

本草綱目に云う、竹葉必ず三つあり。枝必ず二つあり。その根好んで東南に行く。

戴凱之たいきしの竹譜たけふに云う、植物しょくぶつ(うゆるもの)の中、名あり、竹という。剛にわからず、柔やわらかからず、草にあらず、木にあらず、云々、これ通用の證文しょうもんなり。

通用の證歌

木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはし

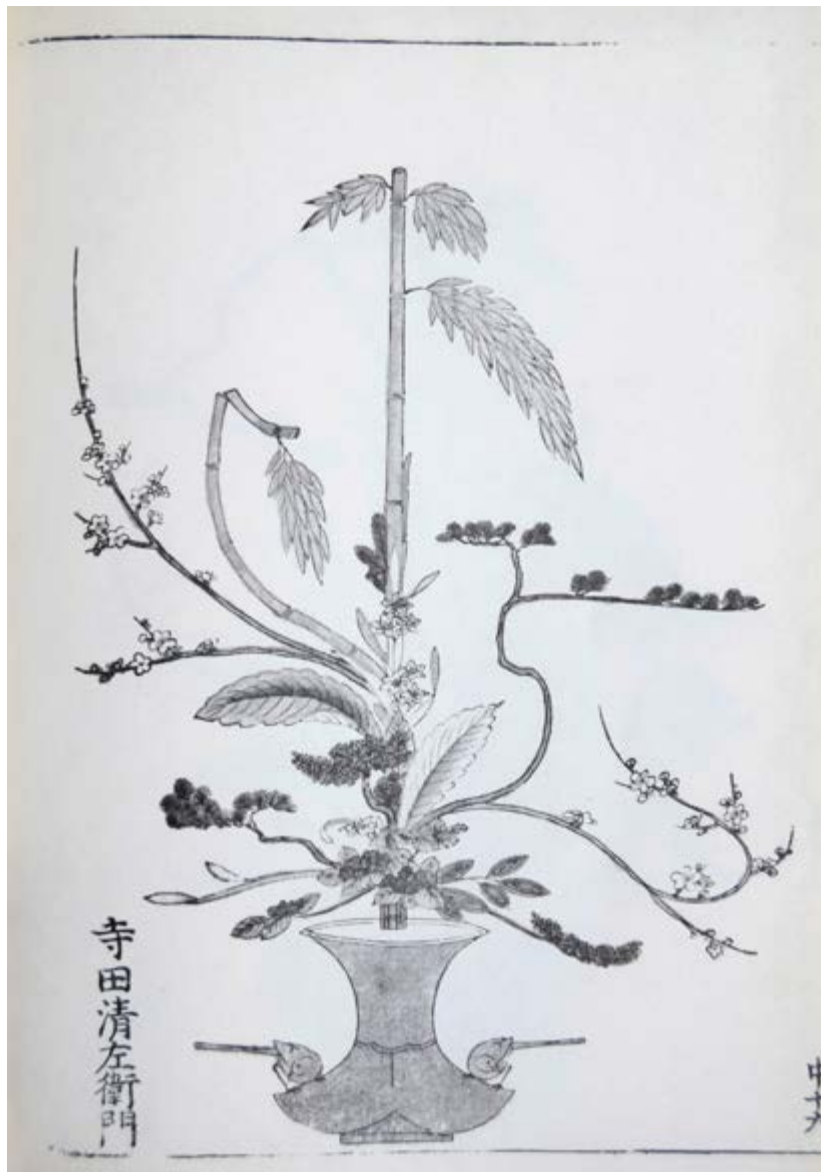
に我が身は成りぬべきなり

異名 石母草せきもそう 此君しくん 吾友ごゆう 不秋草ふしゅう

和名 千色草 小枝草 河玉草 夕玉草ゆうたまぐさ

古歌

秋風はまどなる竹にかよふなり河玉草を



第六十八図
立花 竹直眞
寺田清左衛門
竹 梅 松 水仙 柘植 椿 熊笹 枇杷

なにといふべき

月にきく夕玉草の秋風に音はいつ頃寢覺

めとはまし

竹^{ただけ}黄。また云う、天竺^{てんじく}黄。天竺^{てんじく}二国に生じ、

天竹と名付くは淡竹^{はちく}。

竹は心、請、副にかぎらず、葉を床の後ろ角へなびかせ、上の節より四五分の中にて一文字に切りて、そぐべからず。下は水ぎわより四五分にて、必ず節を見せる。古語に、松に古今の色無く、竹に上下の節あり。この心をもつなり。

竹は古来、上より下までよく見えるように立てるを専らにすといえど、花形によりて、胴、前置にてかくれる事あり。竹を見せんとて花形の悪しきは、却^{かえ}つて竹の賞翫にあらず。

竹の前に苔、晒木の太く直なるを立てること、古来より嫌う。竹をかくすのみならず、竹の直なると同意にて悪しし。



第三十三図

立花 竹除真

除真の内草の花形 菱屋六兵衛

竹 枇杷 松 梅 晒木 柘植 椿 熊笹 檜木

水仙 伊吹

乱世の「茶」と「花」

昨年公開された映画「花戦さ」は、天下人である秀吉と、茶の利休と、花の専好の関係が軸になっている。とりわけ利休と専好の茶室でのやりとりの場面が強く印象に残った。

専好はじめて利休の点てた茶を飲んだとき、何か大きな温かいものに包み込まれ、心が解けてゆくのを感じて涙する。庭、茶室、そこに生けられた花、会話、所作、それらすべてが温かな心で満ちていたのだろう。戦乱の世にあって、利休の茶によって心を癒やし、心を清めることができた武将たちのことを思った。

映画の後半、秀吉の怒りを買った利休に対して、心配でしかたのない専好は「上様に詫言を入れられればいいではないですか。これも『もてなし』だと思って、包み込むように詫言を入れればいいではないですか」と言う。その言葉を聞いた利休は「もてなしか。私はいつの間にか大事なことを忘れていたのかもしれないな」とつぶやく。強く印象に残る場面だった。温かく包み込む心。これこそ、究極の茶であり花である。そんなメッセージが込められている。

茶と花の二人の偉人。ともに命をかけて茶の道、花の道を守り貫いた。そしてその道を、私達も歩んでいる。



京都嵐山花灯路2017

会期 後期12月13日(水)～17日(日)

会場 二尊院山門前

出品 桑原仙溪

臘梅 アララギ

珊瑚水木 (写真②)



三賢人のような 仙溪

花材 大王松(松科)

飯桐(飯桐科)

胡蝶蘭(蘭科)

花器 掛分陶花瓶(清水保孝作)

立派なダイオウシヨウを花器の底に入れた剣山を頼りに留め、イイギリを立て、コチヨウランを出した。単純な構成だが、それぞれの特徴が生かせたと思う。

簡単にいけてあるように見えるが、コチヨウランの茎が長くて丈夫でなければ、このようにはいけられない。そして松の重みを受け止めてくれるどっしりした器を選ぶことも大切だ。

ダイオウシヨウはアメリカ原産で特別に長い3本の葉が出る。日本のお正月にダイナミックな華やぎを添えてくれるが、どんなところで育った植物でもいける対象になる。調和する出逢いを生むのは難しいが、考え甲斐がある。

三つの花材が対等な感じにおさまって、三賢人のようだ。



横から見た奥行き



生花二瓶飾り 仙溪

花材 ヒマラヤ杉(松科)

スプレー薔薇(薔薇科)

花器 杵形陶花瓶

陶抹茶碗

四国の花展でいけたヒマラヤスギは、大切に持ち帰って、今度は生花に直した。生花の基本形から少しはみだしても、自然味を損なわないよう、ある程度の枝は残している。

小振りになったので、赤いバラと一緒に飾ることにした。真に2輪並んでいるのは大らかに考えることにしよう。

ヒマラヤスギは日本では明治時代初期から栽培がはじまったそうだ。原産地はヒマラヤ北西部からアフガニスタン。建築材にもなり、油分が薬やアロマに利用されている。日本の各地に植えられているが、昨秋の台風で京都府立植物園の35mのヒマラヤスギが倒れたと聞いた。高松の栗林公園にも大きなヒマラヤスギがあったので心配している。



「今年もよろしくお願いします」レモン



赤茶色のヒペリカム

櫻子

花材 アマリリス(彼岸花科)
ヒペリカム(弟切草科)
ミリオクラダス(百合科)
花器 陶花器(近藤豊作)

秋が深まると枝も葉も実も赤茶色になるヒペリカム。夏までに剪定すれば9月にはもう一度花が咲くので緑の葉と赤い実が楽しめるが、剪定せずに力強くなった枝はアマリリスの足元にもこんもりと添える事が出来た。昔からの冬の枝もの花材は少なくなつたが、又新しい改良種が加わつて彩りを添えてくれる。

冬にアマリリスをいける時は首元までしっかりと芯棒を入れてあげる事。私の家のように皆が集まる部屋以外寒すぎる室内だと、飾っている花も凍てつく事がある。大輪の花が咲きそろつても、重さと寒さで折れ曲がらないようしっかりと支えてあげよう。



横から見た奥行き



薔薇ばらのように 桜子

花材 葉牡丹はぼたん(油菜科)

ミニ・デンファレ2色(蘭科)

スイートピー(豆科)

花器 赤釉陶花器(宮本博作)

冬の寒さに晒されて葉緑素が抜け、クリーム色に色づいたハボタン。昨年は葉が縮れて切葉水菜のような品種を飾って楽しんだが、今年は丸くて小さいハボタンを選んだ。

ハボタンだけでは地味に見えるが、葉を広げて大きく見せ、スイートピーのような優しい姿の草花と合わせると大輪のバラのようだ。珍しい花ではないが、お正月にしか出荷されないで、一度は買いたくなる。私は料理が好きなので珍しい野菜を買い求めるような感覚で欲しくなるのかもかもしれない。

ハボタンに白いスイートピー。そこへピンクのミニ・デンファレを加え、赤い器にいくと、明るくて華やかな花になった。



横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2019 年
1 月号
No.667

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





二〇一九年

己亥（つちのとい）

干支は全部で60種類あり、それぞれに意味がある。

「己」は10ある内の6番目にあたり、精力が横溢する時期を意味する。

「亥」は十二支の最後にあたり、生命が収蔵された核を意味し、新たな始まりの準備時期をさす。

そして「己」と「亥」には「土剋水」という一方が一方を凌駕する関係にある。つまりステップアップの大事な時期にあふれる精力が邪魔をする、調子に乗ると落とし穴にはまるということだ。

また干支には「納音（なっちゃん）」という別の意味も割り当てられていて、「己亥」は「平地木」、つまり平地に立つ孤高の木という意味がある。

以上をまとめると、二〇一九年は盛んなエネルギーが飛躍のための準備を邪魔するが孤高の継続力で乗りきる、そんな年ということになる。

どんな飛躍をしようか。そのためにどんな準備が必要か。年頭にあって考えてみてはどうだろう。いい考えが見つかればあせらずに、でもとことんしつこく諦めず、そしてできるだけ丁寧に進めて行くことが肝心だ。

しつこく諦めず丁寧に、いい仕事をしよう。



クチナシの実

△ 2頁の花▽ 櫻子

花材 梔くわだしの実 (茜科)

山茶花 (椿科)

花器 漆塗麦酒うるしぬりびい 盃

干支伏見人形「亥」

食品の色づけに使われるクチナシの実が血流を良くする薬にもなる。今年の干支の猪と飾ると形が似て面白い。健康な一年を願って。



横から見た奥行き

南天・水仙・寒菊

△ 3頁の花▽ 仙溪

花材 南天 (目木科)

水仙 (彼岸花科)

寒菊 (菊科)

花器 青瓷壺 (清水卯一作)

常緑で赤い実が美しいナンテンは冬のいけばなに特別感を与えてくれる。辛い時も、難を転じて福となす。



横から見た奥行き



ダイダイ

△表紙の花▽ 櫻子

花材 若松(松科)

橙(蜜柑科)

菊(菊科)

花器 角形陶花瓶

ダイダイの実は冬に色付き春に緑色にもじる。2〜3年は枝に残るの
で「代々」から名付けられたそうだ。
親戚から枝付きで頂いたので松と深
紅の菊を合わせた。漲る力を感じる
器にいけると、花から元気を貰える。



横から見た奥行き

赤芽柳・水仙

△4頁の花▽ 仙溪

花材 赤芽柳(柳科)

水仙(彼岸花科)

花器 四彩塗面取高坏(河井透作)

昨年は華老の鈴木秀映先生、竹中
慶敏先生、そして河野慶雅先生、坪
井二葉先生、清水慶富先生、成瀬慶
重先生、仙石慶綾先生、中村慶美先
生が他界された。花道へのご尽力に
感謝し、謹んでご冥福を祈ります。
先生方から受け継いだ技と心を流派
の皆様と共に大切に次へ伝えます。

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ⑤③

立花秘傳抄 三

草之部 (つづき)

蓮れん
はすのはな

非祝言。一色の外用いず。

花を芙蓉ふようという。葉を荷葉かようと云い、茎くきを茄かと云い、その本を密みつと云い、未だ開かざるを菡萏かんたんと云い、その実を蓮てん・と云い、・中てんを蓮れん肉にくと云い、実ぬけたる跡を蓮房れんぼうと云い、花の中のしべを蓮蕊れんずいという。根を藕ぐと云う。本草綱目に云う、花葉常に偶生ぐふしょうす、偶ならざれば生ぜず、故に藕ぐという。

異名、芬陀利花ふんだりけ。風露良ふうりやう。

和名、露堪草つゆたぐさ。池見草。つまなし草。

古歌

影うつす花やくもらん池見草波にかかり
て青葉そひつつ
なひきつつ花や咲らん露堪草折ぬ枝にも
風のたまれは

・Ⅱ草冠に的

蓮花は水中出生の物なれば草木に立てまぜては池中の景気瓶上にうつらざるゆえ、一色いっしき物ならでは立てる事なし。然れども蓮花一色にて立てるを真の一色といい、水草を立てまじゆるを草の一色と云う。

荷葉一色



桑原次郎兵衛

第百図

立花 荷葉一色

蓮 荷葉一色真 桑原次郎兵衛

蓮に立てまげて苦しからぬ物、芦、蒲、つくも、杜若^{かきつばた}、河骨^{こうほね}、一切水草のたぐいこれを用いる。又古来菊を前置に用いる。水に縁あるゆえか、このほか陸物を立てまげる流儀もあるといえど、花道の正理にあらず、景気もあしければ当流に用いず。

蓮花は浄土の莊嚴^{しょうげん}仏心の譬喩^{ひよ}たり。しかれば立花にも三世不可得^{ふかしく}の理をそなえて秘伝とす。蓮花のみにかぎらず、もろもろの花三世の理あらずという事なし。蓮花に限りてその名あること。立て様秘伝なり。



しもく葉の事、うき葉の事、花つかいの事、

葉遣いの事、蓮肉つかいの事、伝受あまた有り。

蓮の一色は開き葉多く、巻き葉すくなく立てること、池中の景気なりといえど、開きたる葉はしおれやすくして賞翫^{しょうくわん}薄し。古来より



第百一図

立花 荷葉一色
荷葉一色行 富春軒
芦 蓮 小菊

卷葉半ひらきを以て一色を成就する物なり。
ある師曰く、半日の客には立つべし。終日には遠慮すべしとぞ。

蓮の一色立てんとおもわば、自ら池辺へいきて開葉、中ひらき、卷葉、やれ葉、こげは、蓮肉、花は赤白、或いは茎風流なるを見立て切るべし。しからずば立花に心得ある人を遣わすべし。花屋といえど巧者なくては切るべからず。

蓮を立てるには先ず込みの真ん中に細き竹を一本つよく立て置き、初め四五本は竹へ結び付け後は竹針を以て茎より茎へとじ付けて立つべし。すぐなるは竹を通し、横へさは針金を入れて自由に遣う。込みへ茎を指すことなく、こみきわより立て、竹はりがねの余りたる所を二寸ほどにして指し込むなり。

7つの一色の内、杜若、菊、水仙、松は一色以外にも多く使われているが、蓮、紅葉、桜の3つは他の絵図には見られない。紅葉と桜は特別な存在なので。蓮は水中で生育するという出生を重んじて。ただし芦や蒲、つくも、河骨など同じ水草の類は立て混ぜても良いとしている。また古来より菊だけは前置に使うことがあるとして、実際に絵図にも使われている。

※参考文献

『いけばな美術名作集 第三巻 立華時勢粧』
『花道古書集成 第一期第二巻』

第百二図

二株砂物 荷葉一色
荷葉一色砂の物 寸松軒（初版は富春軒）
蒲 蓮





間にいるのが好きなレモンちゃん。

いけ花三人とゆかいな仲間
たち展

会期 12月8日(土)～9日(日)

会場 ギャラリー・テイク・ツー
出品

仙齋との約束

昨年12月に妹のはな、中西さん、奥井さんの三人展があった。健一郎、順之助、琳ちゃん、杉浦さん、赤木さんも加わり、とても楽しい雰囲気の花会であった。

「人生の節目でいけばな展をします」と、父・仙齋と生前に約束していたぞうだ。「おう、綺麗な会になったやない」と笑顔で話す父の声が聞こえる気がする。母・ホッホちゃんの満面の笑顔も目に浮かぶ。父と母が持いた種は、皆の中でしっかりと生長している。

以前に紹介した藁駝^{たぐだ}さんの言葉を思い出す。「私は木の育つ力を損なわないようにしてるだけ」。自由に真剣に自分の世界を表現してくれた妹たちの花会を見て、種を蒔くことの大切さと、伸び伸びと育つ環境をつくることの大切さを思った。



いけ花
三人とゆかいな仲間たち展



エゾマツの立花

〈10頁の花〉 仙溪

京都新聞11月9日(金)夕刊

『明治』を彩るいけばな』より写真転載

(撮影・水沢圭介)

背景 旧三井家下鴨別邸

主屋1階座敷床の間

花型 立花

花材 蝦夷松

梅

梅擬2種

水仙

貝塚伊吹

満天星

椿

木瓜

花器 銅立花瓶

京都新聞の紙面で、明治時代の面影を残す建物に花をいけて紹介する連載が始まっている。花が飾られた場には植物の伊吹が満ちて命が宿り、その場で暮らしてこられた人物にも自然に想いが膨らんでゆく。

この床の間の掛け軸に描かれているのは江戸時代前期の商人、三井中興の祖といわれる三井高利夫妻の像で、のちに三井財閥となる前の基礎をつくった人物だ。

写真には写っていないが床柱にはピンロウジュ(檳榔樹)が使われている。南国の椰子の仲間、床柱に使われるのは珍しい。

部屋の格に合わせて、エゾマツと紅白のウメモドキで立花を立てた。



ツガの立花

△11頁の花▽

京都女流京華会いけばな展

朝倉慶佐先生出品作

花型

立花

花材

梅

梅擬

水仙

貝塚伊吹

椿

紫蘭

花器 銅立花瓶

ツガはマツ科ツガ属の常緑樹。線状で扁平な葉の先がやくぼむ。イチイに似るがイチイの葉先は尖るので見分けがつく。太い幹は砂物むきだが、うまくバランスがとれている。

横から見た奥行き





ヤドリギ

仙溪

花材 宿り木（ビャクダン科）

バンダ（蘭科）

菊「アナスタシア」（菊科）

花器 陶花器（竹内眞三郎作）

冬になると葉を落とした高木に丸い繁みが絡みついていることがある。この不思議な景色の正体はヤドリギで、鳥がこの実を食べ、糞を木にこすりつたところに根を生やして寄生する。冬にも枯れない生命力から西洋では神聖視されて、ヤドリギのついた木には神が宿ると考えられた。悪いものから子供を守る魔除けにもなる。

恋人同士がヤドリギの寄生した木の下でキスすると神の祝福を受けられるとも、敵同士が出会おうと争いをやめるとも言われている。

新しい年の始まりに、良い年となることを願って、ブナの木についた大きなヤドリギを洋菊と蘭と取り合わせていけた。

横から見た奥行き



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2020 年
1 月号
No. 679

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



謹 賀 新 年

令和二年 元日





二〇二〇年・令和二年
庚子（かのえね）

二〇二〇年は子年。干支で言えば「庚子」の年だ。

「庚」は十干の七番目に当たり、植物の成長が止まって新たな形に変化しようとする状態をさす。庚は更に通じ、改まる、入れ替るという意味を持つ。

「子」は十二支の一番目で、土中で発芽したまさにその瞬間。子の字は頭の大きな赤ちゃんを象っている。

「五行」で言うと庚は「金」、子は「水」にあたり、この二つは「金生水」という互いを生かす「相生」という関係とされている。

さらに「納音」という物差しで見ると、今年と来年は「壁上土」という年にあたり、「頑固なまでの不動の精神力を持ち、物事をやり遂げていく」そんな年でもある。

自分の中に秘めた志があるなら、今までできつこいと思っていたことでも、生まれ変わったつもりでチャレンジしてみる。そんな新たな出発の年にはどうだろう。

「立花時勢粧」が一六八八年に世に出て、来年で三百三十二年になる。流派の皆さんと力を合わせて、十年ぶりに京都で花展をしたいと考えている。今年はその準備しなければ。健康に留意していただき、充実した一年となりますように。



黒花 蠟梅の黄葉

櫻子

花材 水仙（彼岸花科）

シクラメン（桜草科）

黒花 蠟梅（蠟梅科）

花器 陶コンポート

シクラメンは地中海地方の11月から3月の花。水仙も地中海沿岸が原産地なので、こんなふうと一緒に咲いているかも。周りには色づいた落ち葉が敷きつもり大地を温めてくれている。そんな想像をしながらいた。

クロバナロウバイはアメリカ原産で初夏に咲くチョコレート色の花は良い香りがする。葉には光沢があり美しく黄葉する。



横から見た奥行き

不思議な力

櫻子

表紙の花の器と干支の置物はどちらも鈴木健司作だが、そうとは知らずに選んで使い後で気がついてびっくり。過去に一度もいけたことのない器なのに。きつと器が私を呼んだのだ。その干支と一緒にいけて。私にとって特別な出逢いになった。



年賀のいけばな △表紙の花▽ 櫻子

花材 松(松科)

梅擬「ウインターベリー」(繡の木科)

水引草の紅葉(蓼科)

水仙(彼岸花科)

花器 陶花瓶(鈴木健司作)

干支 俵の鼠(陶・鈴木健司作)

新年のお祝いとご挨拶の気持ちを込めたいけばなです。ウインターベリーはアメリカ原産。明るく生命力溢れる赤い実から元気をもらえます。松と水仙を取り合わせて、色づいた葉を繋ぎ役に。



横から見た奥行き



バンダと水仙? △2頁の花▽ 仙溪

花材 バンダ(蘭科)

実葛・美男葛(松房科)

水仙(彼岸花科)

花器 陶花器

水仙にバンダだけでは少し「？」だが、ピナソカズラが加わると不思議にしっくりとおさまってくれた。この3者のどれかが1つ欠けても何か物足りない。表紙から2頁にかけて、副家元は4種、私は3種、健一郎は2種。それぞれの器の選択も含めて、3作の対比が気に入っている。



横から見た奥行き



椿 水仙 △3頁の花▽ 健一郎

花材 数椿(椿科)

水仙(彼岸花科)

花器 陶花器

椿に水仙。実際に見た景色では無いがしっくりとくる取り合わせである。水仙を生ける際にも取り合わせる花が見つからない場合が多い。水仙の格にみあうほどの相手を見つける事が難しいのだ。格の見合わない花と生けてしまうとたちまちに花の魅力が互いに発揮されないのである。



横から見た奥行き

師範会研修会

「寒桜の生花」 かんざくら

会期 11月24日(日)

会場 六角会館

参加 46名



あまり生花せいかなを稽古していない人も参加する研修会の花材にしては、寒桜は難しかったかもしれないが、ゆつくり丁寧に枝を撓たがめて、とにかくなんとか三本で形にしてみました。

誰でもはじめから父の絵のようにいけられはしない。まずは少ない本数で、基本の形、役枝の出口の高さ、枝の撓め方、どうすれば足元を揃えられるかを身につけることが肝心だ。

寒桜と呼んでいる切り枝にはいくつかの品種があるが、「子福桜」が多いようだ。コフクザクラは中国原産のシナミザクラと日本のサクラ（コヒガン又はエドヒガン又はジュ

ウガツザクラ）との高配品種と考えられている。小輪の八重咲きで、花には雌しべが複数あって花一輪に二〜三個のサクランボができる。そのことが子宝に通じるとして子福桜と名が付いた。

秋から冬に少し花を咲かせ、春には再び多くの花が咲く。
ちなみに十月桜は八重または半八重で蕾はピンク色。冬桜は白色一重の花が咲くので見分ける目安に。



立花時勢粧の器 ③

図① 瓢箪

瓢箪は古来より縁起の良いものとされてきた。第八十五図は富春軒の合真の立花。合真は婚礼の席で立てる特別な様式で、それに相

応しい器といえる。

図② 藤の花

第十六図の立花は萱草の真。

図③ 紐

宝袋を模つたものと考えられる。第八十二図(テキスト615)と「行の対の花」に使われている。

図④～⑩ 様々な形の耳

図⑥の器は第三十九図(テキスト662)にも使われている。

図⑦の器は「耳口」と呼ばれる。帯状の耳が器の口の端から出て腰に繋がる。

図⑧は器の形も耳の形も独特で

ある。第六十三図「苔松に藤」の作者は服部三郎右門となっているが、初版では作者が書かれていない。第九十図「竹の胴」(テキスト656)と第九十八図「杜若一色の行」(テキスト663)にも

同じ器が使われているが、どちら

も桑原次郎兵衛作。次郎兵衛好みの器といえるか。

図⑨は富春軒作の「菊一色の行」。珍しい耳の形である。

図⑩は銀耳。「銀」は金属の輪遊環と不遊環がある。図⑩は遊環。



第二十九図 テキスト No.657



第八十五図 テキスト No.675



第五十四図 テキスト No.639



第十六図 テキスト No.622・668



第六十三図 テキスト No.661



第八十一図 テキスト No.615・638



第百四図 テキスト No.672



第七十三図 テキスト No.653



第二十六図 テキスト No.663



第九図 テキスト No.622

「星景写真」

健一郎

小豆島で一泊した日の夕食後、星系写真を撮るべく、旅館の前の砂浜で寝転がっていた。写真は光の芸術だ。その場にある光を集め、像に起こす。太陽が沈むと暗くなるため、光を集める時間が長くなる。シャッターを切ってから、下りるまでに時間がかかるのだ。そのため日中に写真を撮るよりも多くの時間がある。そうして長い時間をかけて光を集めるので目視できない星でさえも像として残すことができる。なかなか思うような写真を撮ることはできないが、あーでもない、こうでもないと言いながら模索しているのが楽しい。京都の町中から眺める夜空も悪くはないが、灯りのない自然と近い場所で満喫する夜景はやはり格別だ。

カメラを買うまではただ眺めているだけだったが、実像として残し、思い出す装置として充分な活躍をするだけでなく、どのように撮るか考えるのも面白い。星を山と撮るのもいいし、星だけで撮るのもいい。何をフレームの中に入れ、何をどこに配置するか。写真は個人の意図が出来栄を大きく左右する。絵画と違いオーラまで表現することはなかなか難しく、記憶の中の写したものと実物との差異に驚く事もしばしばだが、一瞬よりも早く、像が撮れるの

がいい。絵画だと一晩に100枚も描いていると寝る時間が無くなってしまう。

立つて空を見ていると首が痛くなるので寝転がると心ゆくまで星の世界に浸れる。時間が経つにつれ少

しずつ星の数が増えていく。暗闇に目が慣れるのか、闇が深まっているのか、あるいは両方ともなのかは分からない。何も考えずただひたすらに感じる。波の音、月のクレーター、雲の動き、潮の匂い。幼い頃からなぜか星を見るのが好きだった。だが

星好きを公言する人と話してもなぜか話しは合わない。星に詳しい人達には、見える星を指差して名前を言い当てたり、先人が繋いで名付けた星の説明を僕にしてくれるが、僕には何の関係もない。僕は星の名を覚える気も、星を繋ぐ気も一切ない。ただ見ているのがいいのだ。

意識して自然を感じとりに行こうとすると、どうも肩透かしに合うようだ。波の音を理屈で解釈する行為は、目の前で起こっている事象を集計し分析しようと試みる事である。分からない事が多すぎるが故に考えている事も楽しく好きだが、自然を感じられるかと言うとそうでもない。自然の事を集計し分析しようとするればする程自然からは離れてしまう。意識して自然を能動的に受信し

に行く行為で感じる自然は、どこか期待、あるいは、見返りを求めてしまっているのか自分の中に残るものは少ない。

ただそこにいる事が大切なのだ。見返りを求めず純粹無垢な心で、頭の中を空っぽにして呼吸をする事も忘れた時に自然が心の中に染み渡り、心を満たしてくれる。

自然はいつでも身の丈に合った気づきしか教えてはくれない。より知見を得ようと前のめりになっても決して解釈し得ない。追いかけても、追いかけても、追いつけないのは僕も自然の一部であるからだ。だがそれは追いかける事を止める理由としてはあまりにも脆弱すぎる。



家元の帰りを待つレモンちゃん。
健一郎撮影。



ひめなんてん
姫南天と水仙

仙溪

花材 姫南天 (目木科)

水仙 (彼岸花科)

小菊 (菊科)

花器 陶花器 (小川欣三作)

ヒメナンテンは中国原産。ナンテンよりも葉が小さく締まっているので優しい印象を受ける。実がなりにくく、葉を楽しむ花材だ。



横から見た奥行き

水仙対決

仙溪

今月号は健一郎の発案で全作にスイセンを必ず使うことにした。それなら「立花時勢粧」の絵のような暴れたスイセンもいけてみたいねということとで特別にお願いして取り寄せてもらった。普段は出荷しないようなひねたスイセン。生産者もどんな花になるのか是非いた花を見てみたいとのこと。こちらの欲する自然の姿を同じように思い描いてもらえるまで、地道なリクエストを続けた。なんだか面白くなってきた。



除真立花^{のきしん}

水仙一色

仙溪

花材 水仙（彼岸花科）

寒菊（菊科）

著我の葉^{しやがのあやめ}（菖蒲科）

花器 銅立花瓶

健一郎が卒論のテーマに「立花時勢粧」を選び、江戸時代前期、型を重んじる立花に異を唱えて、流祖が後世に伝えようとしたことを検証してくれた。

いけばなではまず初めに型通りにいけることを目指すけれど、型と技術が身についた先には、志しだいでもつと奥の深い自然の妙を表現できる世界が広がっている。「植物が本来持っているものを損なわないようにしなさい。そうすれば自ずと花に自由を得ることができるよ」。流祖が一番伝えたかったのはこのことではなかったか。

今回、水仙の葉に針金を通さないで立花を立てたが、針金を通した葉とは明らかに表情が違う。いきいきしているのだ。いけた後もよく保ってくれる。大切な事を流祖に教えてもらった。



横から見た奥行き



水仙一色 二株砂物 健一郎

花材 水仙(彼岸花科)

寒菊(菊科)

小菊(菊科)

著我の葉(菖蒲科)

花器 銅砂鉢

この立花は灘黒岩水仙郷の景色を再現したものである。自然を一つの器に再現する事は、私にとって花との理想の付き合い方である。地に根を張っている姿を知らずしていける花はどこか物寂しい。いけばなと向き合っていると自然に身についた考え方だ。自然界と人間の橋渡しの存在であられなと思う。将来確実に人工物で埋められていく都市における拠り所にもなればとも考えている。

水仙郷の水仙を初めて見た時の衝撃は今でも忘れられない。標高608mの論鶴羽山系から海を臨む45度の急傾斜7ヘクタールにわたって500万本の野生の水仙達。八重咲きの水仙、大きすぎる袴から爪だけ出した葉。お花屋さんでは決して見る事ができないうねった数数の葉からは物語を想像することも可能で、その土地の性質を分析しようとする事だっでできそう。水仙に限った話ではないが、自然光で見る植物のなんと美しい事か。燦燦とお日様の光を受け、透き通る葉や花の美しさに改めて驚嘆した。

普段は水仙の立花を立てる際は葉の先までほとんど全ての葉に細い針金を通して形で形を作っていた。針金を用いる事で

素直な水仙を自然にある風合いに生けるのだが、その花はどんなにきれいに生けられたとしても人が作った自然である事実は変わらない。

いけばなにおいては匿名化は必須であると考えている。いかにその作品から自分の匂い、影すらも消し、本来の美しさを見出し、引き出せるように励んでいる。人がいけている以上は絶対に不可能な事だが、限りなく匂いをゼロに近づける事はできるはずだ。今回の立花の挑戦もその一環である。お花屋さん特別に頼んでもらった面白い葉は、針金を使わずして自然のはみ出しものを表現できるのだからこれ以上嬉しい事はない。

花を野菜に例えると分かりやすいかもしれない。最近、奇形と呼ばれる野菜達が見直され、スーパーに並ぶ事が増えてきた。もしその奇形を生かした料理屋さんがあれば行ってみたいものだ。規格品品の規定から離れた野菜のみを使った「奇形の野菜レストラン」絶対に流行るはずだ。



斜め横から見た奥行き



水仙 木瓜 健一郎

花型 生花二種挿し 草型

花材 木瓜（薔薇科）

水仙（彼岸花科）

花器 煤竹竹筒

特別好きな花は木瓜と水仙だ。この2つの花にはとびっきりの思い入れがある。この2つの植物がいけばな以外の事に没頭していた時間も、いけばなを忘れさせないでくれた。木瓜はいくら頭で考えようが思いつきもしないような格好のいい枝、荒々しいトゲ。それにおよそ似つかわしくない優しい色形をした花のギャップにはその時々を私を驚かし続けてくれている。

一方、根締めになっている水仙も木瓜に劣らずの魅力がある。愛くるしい花を咲かせ、なんとも形容し難いいい香りを放つ。その優美な匂いに花瓶を落とそうになる程だ。

好きなものと好きなものが合わさるともつと好きなものになる事は必ずである。などと極論を言つつもりは無いが良い組み合わせではあると思う。両者共に複雑な魅力を持つ。



横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021 年
1 月号
No.691

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





謹賀新年

皆様のご多幸とご健康をお祈り致します。

南天の姿を

△2頁の花▽ 櫻子

花材 南天(目木科)

デンファレ(蘭科)

ミリオグラタス

(貝目科)

花器 陶花器(宇野仁松作)

真っ直ぐに立ち上がる姿の南天。縁起の良い木でお正月の花材として多く出荷されるが、今年は早くから紅葉のきれいなものが多かった。

足元には柔らかくしなやかな白いデンファレをいけた。

ミリオグラタスを添えて、硬くてゴツゴツした南天の枝を見えなくして軽やかに。

お庭に植っている雰囲気とは違う私好みの華奢で軽やかな姿にしてあげるのもいけばなの楽しみのひとつ。





稽古の立花

△ 3 頁の花 V 健一郎

花型 除真立花 のきしん

花材 柊 ひらぎ (木犀科)

雪柳 ゆきやなぎ (薔薇科)

水仙 すいせん (彼岸花科)

鳥不正 とりふさぎ (目木科)

椿 つばき (椿科)

赤芽柳 あかめやなぎ (柳科)

寒菊 かんぎく (菊科)

小菊 せうぎく (菊科)

花器 陶花器

毎月一回家元の立花研修会が行われている。一杯余分にお花を頼み、私はその日の晩に立てる。毎度、見事な取り合わせで、毎月の楽しみの一つである。立てる前に家元の説明を受けることができないのが残念である。毎回役枝のらしさ、その植物のらしさを意識しており、今は特に奥深い景色が作れたらなと意識している。お風呂上がりの半分目が閉じかかっているように、家元の発す一言が次への課題となっていく。





松をいける

△表紙の花▽ 仙溪

花材 枝若松（松科）

水仙（彼岸花科）

薔薇（薔薇科）

「タージマハル」

花器 陶深鉢（フランス製）

お正月には松をいける。

特に若松のなんと美しいことだろう。力強く、若々しく、清々しい。

いける前にはそれほど強くは感じないが、いけた後では印象が変わる。とても生き生きと輝いて見えるのだ。水を充分に吸い上げ、葉に力をゆきわたらせるからだだろう。或いは心地よい空間を得て、伸び伸びと本来の姿を見せてくれているのかも。ほんとに美しいと思う。心からそう思う。こんな松を育ててくださって有り難うと言いたい。だからこそ、大切に扱って、心を込めていけたいと思う。

このバラも特別に育てられたバラのようだ。たった2本でも松に負けていない。スイセンを加えて、私の大好きなとり合わせにした。



二〇二一年

令和三年

辛丑（かのとうし）

二〇二一年は丑年。干支の「辛丑」にあたる。

「辛」は10段階の8番目で、字の辛は刺青の針を表し、痛みを伴う幕引きや辛い衰えを意味する。

「丑」は12段階の2番目で、字の丑は指に力をこめて曲げた形を表し、命の息吹が充滿している状態。

「辛」と「丑」は「土生金」という「相生」の関係にあり、相手の力を生かし強め合う。

「納言」という物差によると今年はずれと同じ「壁上土」で、地道で堅実、不動の精神。

以上のことからすると、衰退や痛みは大きいですが、大きな芽生えを感じる年であり、堅実で強い精神力が求められる。

まさにコロナ禍による試練が続くそうだが、こんな時こそ強い生命力と強い精神で、新たな輝きを生み出そうではありませんか。



新春の清々しさ

すがすがし
△ 4 頁の花▽ 仙溪

花材 青文字 (楠科)

ミニ薔薇 (薔薇科)

アイリス (菖蒲科)

花器 青磁花瓶

アオモジの丸い蕾の中には数個の花が春を待っている。割ってみるとレモンのような香りがする。春にはモコモコと賑やかに咲き出すのだが、今はまだ静かな風情である。

アオモジの相手には瑞々しい華やきが求められる。アイリスのクールさとミニバラの優しさが程良く寄り添う。

蛇の目松

△ 5 頁の花▽ 仙溪

花材 蛇の目松 (松科)

カーネーション (撫子科)

花器 陶花瓶

このジャノメマツはクロマツの斑入りで、とても珍しい。よく見るジャノメマツはアカマツの斑入りで、葉の元が白 (黄色) くて優しい印象の枝だが、クロマツのジャノメマツはとても力強い。単体でも存在感があるので、シンブルにカーネーションを合わせたが、ピンクを加えたので優しい感じになった。赤色だけでも良かったかな。

花と器

仙溪

中国の青銅器の歴史を簡単に紹介したことから、立花が生まれる前の花と器について調べ始めたが、日本の絵巻に挿花図を探し、中国、インドの遺跡に残された壁画や浮彫に挿花の痕跡をもとめる内に、仏教の供花はいつから瓶に花を立てるようになったのか、などどんどん興味が膨らんで、なんだか宝探しでもしているみたいだ。

今月号で紹介した中国北方の墓に描かれた瓶花図も大発見である。絵は拙い感じだが、描かれたテーマに心を打たれた。仏のためのものとはいえ、様々な花を育てて大事ににかけていたに違いない。

そんな瓶花が仏教の供花に加わったのはいつどこからだったのか。まだまだ宝探しは続く。

赤芽柳

△6頁の花▽ 仙溪

花型 生花 草型 留流し

花材 赤芽柳(柳科)

花器 煤竹竹筒

この赤芽柳や前号の行李柳の生花を美しくいけるにはそれなりの技術が必要となるが、それだけに綺麗に入ると嬉しい。技術は簡単には身につかない。何度もいけることしか近道はない。





臘梅 椿

△7頁の花▽ 仙溪

花型 生花 草型 副流し

花材 臘梅（臘梅科）

椿（椿科）

花器 龍耳銅花器

ロウバイ（臘梅・蠟梅・蠟梅）は花を蜜蝋に見立てたり、臘月（旧暦12月）に咲くことから名前があるそう。中国原産で、「立花時勢粧」にはまだ記述がない。甘い良い香りがする。

作例ほどの古木はめつたにいけない。挽めが効かないので、役枝の選択が形を決める。良い曲がり方がする。

万年青

十三葉一果

前号に掲載した万年青十三葉一果の図が十二葉一果の図だったので再掲載します。

留（流し葉）



『ええ格好しい』

健一郎

おじいちゃんは行き先を間違えたタクシー運転手に「面白い話をありがとうございます。これはそのお礼です。」とチップを渡し、満たされた笑顔で車から降りた。

道のプロフェッショナルであるタクシートの運転手があるう事か、道を間違え一時間ほど道を走らせた上に、おじいちゃんの機嫌を何うような会話に苛立ちに身を震わせていた自分がどうでもよくなった。何が起っているか分からず、いつとき頭が真つ白になり、私の関心は祖父への不信感へとすり替わったのである。平然とそういつた行動をする祖父を側で見てきたが、いつもいい顔をしていた。祖父は何も言わずにムスツとしている私を見て楽しんでいないに違いない。

自分の事で精一杯な時にこの話をよく思い出す。祖父が持っていた自信、余裕への憧れからだと思う。余裕があればここまで人のことを思えない。

この話を思い出すたびに何故か、動物が自分の損失を顧みずに、他者の利益を図る行動という、利他的な行動について考えさせられる。祖父が利他的な行動をしていたかは不明なままであるが、私はいつも思考の中心には自分がいたことを自覚していたからだろう。人を自分と同じように接することができている祖父が

羨ましかった。祖父は自分に酔っている様にも見えたが、それはそれで気持ちがいいものだ。何故なら2人ともいい気持ちになっているからである。

人間に、みられる利他的な行動は余裕からしか生まれなのではないだろうか。

極端な例になるが、余命宣告を受けた人で、世界経済について本気で心配する人はいないだろう。自分へ差し迫った恐怖があると、視野が一気に狭くなる。自分の事と、自分に近い人たちの事を考える。人は本当に面白いもので、紛争でどれだけ被害が出ようと、自分の顔にできたニキビの方が重大な問題であるのだ。

自分に余裕が無いと人に考えを及ぼせることはできない。ある程度自分のコンディションを日頃から整えておく必要がある。

直近では、通りすがりのご婦人が落とした携帯を拾うことができなかった。引越しのため、大きな荷物を両手いっぱいにつけていたからだ。心に余裕は持っていたのだが物理的に手が塞がってはいけなそうもない。

その点、グループホームでは役割が与えられていて気持ちがいい。お給料はいたれているが、フリーマンとして利用者さんの困りごとを支援し放題だ。とはいっても利用者さ

んがしたくて出来ないことを出来ない分だけ補助するだけの事である。生きる事に疲れた人であつたとしてもせつかく生きているのだから、今を笑えるものにできたらなと思つている。お節介をしたりして家に帰りたい利用者さんの気持ちが「家庭帰りたいけどここに居るのも悪くないな」程度に思つて頂けることを日々、目指している。お礼の言葉も嬉しいが、「ここはええところ。きてよかった。」この言葉ほど嬉しいものはない。

いい状態とはいつも適度に手を抜いて肩に力が入っていない状態のことである。手ぶらで何も考えないでいると、周りの情報がよく入ってくる。自分が街を歩いているのではなく、街を歩いている自分に視点が変わる時でもある。

利他的行動の起源は蟻や、蜂が示してくれている。自分だけの利害を優先するわけではなく、集団として生存するために、機能的な社会を作り、それぞれの環境を取り巻いている。生き物の世界では集団内では、利己的な個体が利他的な個体に勝つが、集団間では、利他的な集団が利己主義者の集団に勝つとされている。そして、自然淘汰は個人のレベルだけではなく、集団レベルでも生じる。集団内のメンバーを犠牲にしながら集団をより幸福にするような集団選択のメカニズムが働いているというのだ。

それはもちろん人も例外ではない。社会性に基づく利他主義こそが人と言う生物種の成功には必須だったに違いない。生物進化の歴史における重大なステップでもある。個人が他のために効果的に分業し、最終的には自分に返ってくるものを期待している。

不機嫌そうな利用者に向かつて、とびきりの笑顔を見せると、そこそこの笑顔が返ってくる。利用者さんのとびきりの笑顔が見たくてとびきりの笑顔を作ったはずなのに、利用者さんのそこそこの笑顔で私は本当にとびきりの笑顔になつてしまう。そして本当に笑うと利用者さんも本当に笑ってくれる。利用者さんに少しでも不機嫌な状態でいてはしくい。と思つた気持ちが作つた笑顔で本当に自分も笑顔になつただけの話である。

余裕なんて全くない時に、無理矢理にでも余裕を作れば、自分も救われるのではないだろうか。



私自身、自己中心的な性格を重々、承知している。第一声が、「僕」または、「俺」であるからだ。だが利他的ともみとれる行動をすることもある。それは自然にでた私の一面ではあるが、自分のその行いに、いい気分になつているので利他的な行為として認めていない。その場では利他的に見えたとしても、長期で見ると自分に返ってくる見返りを見込むこともある。何かされたら何かを返さないといけない気がする。人が生きていることに喜びを感じるようになった最近では、考えるより先に身体が動くようになりつつあることをこの一年ぐらいで感じる。自分が中心ではあるが、自分が助けたいから助けているだけである。少し冷たく感じるがそれぐらいいいのかもしれない。

行為までの思考過程は違つても結果の行動が同じだったらそれはそれで素敵な話ではないだろうか。ええ格好をするのは気持ちがいいものだ。



あえて赤い実を2種使うことで、温かみを感じてもらいたかった

(写真①)

花材 飯桐 南天 菊

桑原仙溪 二尊院門前

前期展 12月11日(金)～15日(火)

当流出品

協力 京都いけばな協会

会場 嵐山一帯

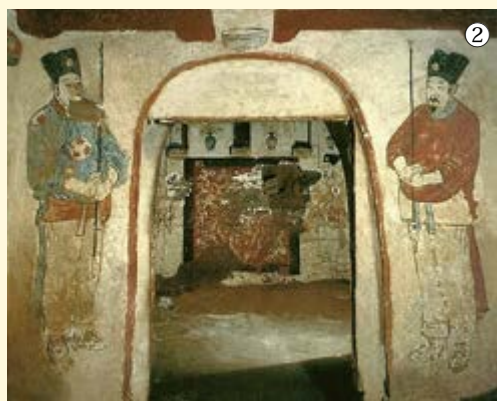
会期 12月11日(金)～20日(日)

いけばなプロムナード

京都嵐山花灯路

張世卿墓の壁画

前室4面の壁画 (図①～④)



中国「遼」の壁画墓

仙溪

遺跡の壁画を調べていたら、花瓶に花を挿した絵がいっぱい出てきて驚いた。日本の平安末期にあたる西暦一一六六年に造られた、中国宣化地方の豪族の墓である。

中国では唐が滅び、五代十国の時代を経て宋の時代へ。唐時代の国際色豊かな王朝文化から、宋時代の自由な庶民文化へと変わってきた頃である。

その辺りは遼（内モンゴルを中心）に中国の北方を支配した国）の統治下にあり、農耕地でありながら遊牧民の影響を色濃く受けた地域だ。そんな土地の漢民族の豪族、張世卿という人の墓である。

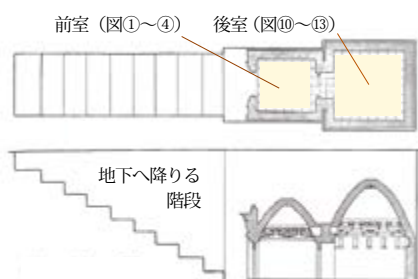
張世卿の墓は地下に穴を掘って造られている。階段を降りて行くとまず前室があり、その奥に棺が置かれる後室がある。すべて煉瓦で造られ、白い漆喰が塗られている。そして色鮮やかな壁画が描かれている。

墓誌によると張家は代々農業に従事し、地主として土地を賃貸しながら果物を栽培し家財を蓄え、天災の年でさえ粟を献上し、民衆に与えたため官位を拝領したとある。

そんな中でも張世卿は自らよく働き、当時の道教に憧れ、儒学を崇め、仏教を敬い、多くの人から慕われる人物であったようだ。

彼は仏への供花のために珍しい花を育て、特別に花瓶まで造らせた。その花の種類は百を超え4万本に至り、五百個の瑠璃瓶（ガラス花瓶）

⑤ 墓の平面図と側面図



出展：①～⑬

<https://artouch.com/views/content-280.html>



後室4面の壁画 (図⑩～⑬)



を作ったと記されている。張世卿という人が供花に対して拘りを持っていたこと、そして当時の供花に瓶花がすでに加わっていたこと、さらに園芸栽培のブームがおこっていたことが推測できる。

後室、天井中央の蓮華模様の周りには星座図と散華が描かれ(図⑥)、梁の下に蓮華台座と蓮の葉にはさまれた長方形の凹みがあり、その間に瓶花が供花として描かれている(図⑦⑧⑩⑬)。その数18。生前に彼が行った供花の功德を表したものでしょうか。そうすると凹みにはそれぞれ

れ仏像があつたのかもしれない。
青い花瓶にハスの花と葉が見える(図⑦)。他の木や花は何だろう。

描かれている情景が興味深い。朝、扉の外から侍従が入ってきて読経の用意を始める(図⑩)。机には経箱と經典、茶、香が用意され、そして今まさに瓶花を供えようとする男性の姿が(図⑨⑩)。さらにお茶を準備する場面(図⑫)、夜にお酒を用意する場面が続く(図⑬)。

なんて和やかな雰囲気なのだろう。こんなお墓があつたとは。

九百年前、熱心に花をいけて精進を重ねた張世卿という人がいたことを、壁画は私達に教えてくれている。

参考…学習院学術成果リポジトリ
論文「宣化地方遼時代張世卿壁画墓に描かれた器物」李含





紅葉一色
こうよういつしき

健一郎

花型 砂物 紅葉一色
すなぶつ もみじ かえで

花材 いろは紅葉（楓科・無患子科）
もみじ かえで びくろくじ

松（松科）
しょう しょうこ

晒木
しやれぼく

花器 銅砂鉢
どうさひつ

砂物についてはまだ全く分かっていない。ただ枝の赴くがままに立てていただけである。写真では伝わらないが大きな松の枯れ木の控枝を気に入っている。大きな枠組みとして、真行・草とあるが、真から順番にバランスを取ることが困難になっていく。役枝を際立たせるのではなく、紅葉の葉を多くのこした。次の日には葉がカリカリしていたため、今年はただ自然の紅葉が散った時とは違い、自分の一部が散っていくような複雑な気分になった。数年後にこの作品を見てどう自分が思うかは分らないが、今は満足している。綺麗だ。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2022 年
1 月号
No. 703

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





謹賀新年

皆様のご健康とご多幸をお祈り致します。

二〇二二年

令和四年

壬寅（みずのえとら）

二〇二二年は寅年。干支の「壬寅」にあたる。

「壬」は10段階の9番目で生命循環の終わりの位置に近く、次の生命を育む準備の時期。字の壬は「妊む」に通じ、水の兄とは陰陽五行説の「水の陽」のことで厳冬、静謐、沈滞を表す。

「寅」は12段階の3番目で生命循環の初めの位置に近く、誕生を表す。寅は弓矢を両手で引き絞る形から生まれた字で、動き初め、胎動といった意味を持つ。陰陽五行説では「木の陽」にあたり、強く大きく成長することも表している。

「壬」と「寅」は「水生木」という「相生」の関係にあり、水が木を育み強くするイメージ。

「納言」という物差しによると壬寅は「金箔金」で、傷つきやすい脆さはあるが本来もっている金の資質を生かすために鍛錬すれば成功につながることを意味する。

大きな成長の前段階として、良い資質に磨きをかけて実力を養う、そんな年になりそう。まずは自分身の良いところを再認識しよう。



春よ来い♪

△2頁の花▽ 仙溪

花材 路の臺ふきのとう (菊科)

路の葉

椿2種 (椿科)

花器 銀滴抹茶碗 (近藤高弘作)

昨年3月初めに、春の訪れを感じながら庭の花を特別な器にいたけた。毎日、心豊かに季節を味わっている。



正月花のいけなおし

△3頁の花▽ 仙溪

花材 枝若松 (松科)

アイリス (菖蒲科)

スイートピー (豆科)

花器 陶花器

松、水仙、千両でいけていたのを、アイリス、スイートピーにいけ替えると、一足早い春を感じられる。





松除真の立花

△4頁の花▽ 健一郎

花型 除真立花

花材 松(松科)

梅擬(繡の木科)

水仙(彼岸花科)

木瓜(薔薇科)

霧島躑躅(躑躅科)

小菊3種(菊科)

晒木

花器 天女文銅花器

松が好きで年中見ているのだが、秋が終わる頃から存在感をますのが毎年のことである。冬の木瓜と水仙がひっそりと咲き、梅擬の実に目がいく。これから咲く椿ともう時期が終わる菊がともに控枝の景色を作っている。次の季節を感じさせる立花である。





梅擬の生花

△5頁の花▽ 健二郎

花型 生花 草型 副流し

花材 梅擬(繡の木科)

花器 遊環耳付銅花器

副流しの生花。枝振りを生かしながら。竹筒に生けると安定が悪く銅器に生け替えた。実が強く見えて格好良くなった。



レモンちゃん

4週間前に鉢から切っつけていた大菊。今も玄関の水溜に浮かべています。(写真は3週間目の12/9撮影)





八重の水仙

△6頁の花▽ 健一郎

花材 水仙(彼岸花科)

山茶花(椿科)

花器 陶小壺

花屋さんを通して農家さんから頂いた八重の水仙。実際の水仙峽へ足を運ぶと八重のものや奇形の水仙を見かける。この水仙がよく見えるよう器と相手を考えた。虫食い葉のある山茶花の蕾とよく合う。





器のチカラ

△7頁の花▽ 櫻子

花材 千両せんりょう (千両科)

シンピジウムしんぴじうむ (蘭科)
薔薇ばい (薔薇科)

花器 陶花器 (柳原睦夫作)

不思議な形の器だ。三方にお団子がついている。手に持つとコロンとした丸みが子犬のようで愛らしい。でも中を覗くとふくらみの内側は深い洞窟のようにも見える。色んな顔を持つ器。この器には名前がある。「ふくら壺」という。ふくらは膨らみのことだが、「福良」と書く縁起が良い。そう思つて器を見ると福の神にも見えてくる。器との出逢いで花の見え方が変わる。器のお陰で豊かな温もりを感じる花になった。



いけばなインターナショナル
京都例会
デモンストレーション

会期 11月16日(火)

会場 京都ブライトンホテル

講師 桑原健一郎(写真①～⑦)

デモンストレーションのお話をいただいた時には嬉しくて仕方がなかった。飛び切り綺麗な花と、自分の花と向き合う様子が少しでも伝わっていればと思う。自分が思う好きな花をたくさんの人に見て頂くことができた。(健一郎)

アタラシイいけばな

×

モクテル体験

会期 11月19日(金)～20日(土)

会場 エースホテル京都

講師 桑原健一郎(写真⑧～⑨)

ここ数年空間を隔てるしきりの文化に注目し、イベントに合わせて屏風をこしらえた。参加者一人一人の「らしさ」を屏風につけて、集めることで、その場限りの空間の創出をねらった。全員のいけばなが集まって、一つの作品になっている時間は、各回15分ほどだったが、見応えは十分。見事な花の空間であった。

イベントを通して、花だけでなく時代に耐え抜いた文化を次の世代に引き継ぐ事ができるきっかけになればと願っている。(健一郎)



③ロウヤガキ、ヒゴギク、キンパイギク。 ②キリシマツツジ、ミダレギク2種。 ①マツ、スイセン、ドウダンツツジ、ボケ、ツバキ、コギク他。



⑤マユミ、オオギク、ミダレギク、モミジ。 ④ウメモドキ、オオイトギク、サザンカ。





新春を寿ぐ
 〓表紙の花〓 仙溪

花材 松(松科)
 薔薇(薔薇科)
 エビデンドラム(蘭科)

花器 銀彩陶花器(森野泰明作)

自由に枝を伸ばす松とこの黒銀の器はどちらも風格と軽妙さを併せ持っている。両者の出逢いがつくる特別な雰囲気。いけばなの面白さはこういうところにこそあるのだと思う。赤いバラと白いランも絶妙なバランスに役買っている。



京都嵐山花灯路 桑原仙溪(写真⑫)

12月10日(金)～14日(火) JR 嵯峨嵐山駅前
 今回は最後の嵐山花灯路に多くの人が訪れていた。

花材：桐、ホーリー、垂柳檜葉、百合

『信仰の場』

健一郎

信仰の対象となる場に興味が
あり、暇もあるのであちこちへ
まわる。今回は鳥根県の出雲大
社と鳥取県の投入堂を目的にい
くつか巡ってきた。信仰の対象
は世界に目を向けると特異なも
のがあるが、自然に対するもの
であつたり自然を介するものが
多い。理屈なしに信じることが
できる説得力を持つ場や物はそ
う多くはないだろう。

出雲大社の御本殿から特別な
何かを感じた。人工物であるは
ずだが、自然的な魅力を感じる。
それは大社を構成する柱や装飾
がそうさせてるのであろうか。
不思議な感覚だつた。というの
も、場そのものからは強い何か
を感じ取ることができなかった
からだ。

大社からは理屈なしに信じる
ことができる説得力を感じた。
伊勢神宮や、大神神社の周りの
自然から感じられる場とは違
い、つくられた場であるかのよ
うだつた。信仰する態度が形と
なつて現れたものだろうか。も
ともと特別な場であつたのか特
別な場を作つたかの違いであろ
う。どちらも特別な場であるこ

とに変わりはない。出雲の大社
と伊勢の神宮の在り方は違え
ど、見て感じた不思議な感覚は
どこか似ている。

出雲大社の神殿は他の神殿と
見比べても大きかつた。今の本
殿の高さは24メートルであるら
しいが、4世紀ごろに作られた
という本殿の高さはビルの15階
建てに相当するそう。最近、
巨大な柱が新たに発見された
り、現存する絵図から専門家が
調べたところ、これが有力な説
であると聞いた。出雲大社の高
さとその大きさが、理屈なしに
信じることができると説得力を生
み出したのだらう。出雲大社の
本殿や、構成する社、一定の間
隔に植えられた松からも神秘さ
や凄みを感じた。

想起されるのが樹木信仰であ
る。日本はもちろん、ユーラシ
ア大陸一帯にもみられる信仰
だ。ヨーロッパでは真つ直ぐに
伸びた針葉樹を切り倒して立
て、周囲で踊るメイポールとい
う五月祭がある。日本の水口祭
りに似た意味を持つ祭だ。同様
にクリスマスツリーも樹木信仰
が強く関係している。高さは大
切な要素なのだろう。

そしてこの心や本質は立花の
真として形を残っている。

日本では杉や檜などの常緑針葉
樹の大本は、天から神様が降り
て宿するという観念で注連縄を張
り、御神体として崇められてい
る。後に立花の真になり、門松
も繋がっているといわれている。
出雲大社の高さへの意識と
関連していると思う。積み木を積
み上げるのも高いタワーを作る
のも似た物だろう。

地元の方に聞くと年間を通し
て風が強く吹くため家の周りに
松を植え、家を守つたそう。近
年の台風増加により松が倒れ
ることから築地松もなくなり
つつあると聞いた。僕が出雲に
おとづれた際は神社の周りに築
地松があるぐらいだつた。稲佐
の浜に行くとき強い風にさらさ
れ続けている松と出会つた。一足
先に咲いている椿を撮影するも
止まつたところを撮影できな
かつた。出雲で感じた風や海の
波、太陽は古事記を少しばかり
思わせる場だつた。色濃く残つ
ていたと言いつらいが、残り
香を嗅ぐことができた。

米子から車を1時間半ほど東
へ走らせると三徳山の三仏寺に
着く。三仏寺の投入堂までの参
道はおもしろかつた。修験道
の開祖であると言われている
役の行者が投げ入れたという御
堂だ。なぜこの場所を選んだの

か。ずっと気になっていた。二
足歩行できないほど急勾配の参
道を手も使い登っていく。岩や
木の根を頼りに、這い上がる。
途中で鎖を使わないと登れな
い場所や、ここから足を滑らせ
たら命を落とすであろう箇所が
何箇所かあつた。周りの景色を
楽しみなが楽しく登つた。登
拝というよりは好奇心で投入
堂までの道中を楽しんだ。和装
を着かけているとなんだか僧侶
のままごとをしている気にもな
る。

投入堂は建築的にも強い関心
を寄せられている。人の手に

よつてつくられた御堂だが、山
に溶け込み違和感が全くない。
むしろそこになければならない
と思わせるほどに存在感がない
ことが強く気になった。理屈
なく納得できるのは気持ちがい
い。建物が景色に溶け込んでい
たように感じた。静かに強くそ
こに在つた。見事である。

理屈なく納得できるような、
静かに強くそこに在る花を生け
たい。そしてその花が場に溶け
込んでいると存在感も無くなる
のだろうか。その時には私もそ
んな人になつていだろうか。



三徳山の三仏寺投入堂への参道の途中の文殊堂にて。

松之一色

花伝書を見る

松の二色（松の二色真：初版）

桑原治郎兵衛（富春軒：初版）

松 苔

（立花時勢粧・下 秘曲の図）



桑原治郎兵衛

立花時勢粧「松一色」

この絵図は木版刷りに彩色されている。墨色だけの絵と比べてみると、苔生した枝や赤茶けた松葉の微妙な味わいが絶妙に彩色されているのがわかる。

想像だが、富春軒仙溪が絵を描き、彫り師、摺師によって木版刷りができた時点で、絵師もしくは富春軒本人によって念入りに彩色が施された

のだろう。

流祖の息吹を感じてもらいたくて、原寸大で掲載させていただいた。3月に立花時勢粧333年・桑原専慶流いけばな展を予定している。タイトルは「花の芸術」。代々の家元が大切にしてきた「花を敬う心」で皆さんと共に花をいける日を楽しみにしている。

仙溪



水仙 金盞花

△12頁の花▽ 仙溪

花型 生花 株分け

花材 主株 水仙（彼岸花科）
副株 水仙（彼岸花科）

子株 金盞花（菊科）

花器 陶水盤

キンセンカは冬から春に咲くヨーロッパ原産の花で、古くから栽培され立花時勢粧でも「水仙一色」の前置にホンキンセンカ（一重咲き小輪）が使われている。（テキスト676参照）

花色がスイセンと良く合っている。上品ないけ方で、温かな色を楽しみたい。



いけばな

桑原専慶流

テキスト

2023 年

1 月号

No. 715

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





謹賀新年

皆様のご健康とご多幸をお祈り致します

二〇二三年

令和五年

癸卯（みづのとう）

二〇二三年は卯年^{うどし}。干支^{えと}の「癸卯^{みづのとう}」にあたる。

「癸」は10段階の最後。次の生命を育む準備が完了した状態。水の弟とは陰陽五行説の「水の陰」のことで小寒、閑静、渋滞を表す。

「卯」は12段階の4番目。草木が地面をおおう状態。陰陽五行説では「木の陰」にあたり、控えめに成長することを表している。

「癸」と「卯」は「水生木^{すいしょうぼく}」という水が木を育む「相生^{そくせい}」の組み合わせなので、寒さが緩んで萌芽を促す年ということになる。

「納音^{なつおん}」という物差によると「癸卯^{みづのえとら}」は昨年の「壬寅^{みづのえとら}」と同じ「金箔金」で、鍛錬すればもともと持っている金の資質が磨かれて力を発揮することを意味する。

京都では中学校いけばな体験教室が全校で行われるようになった。生徒達が花を大切にいらしている姿を見ると、いけばなが持っている本来の力に気づかされる。

花のいのちが人の資質を磨く。



白文字 〆2頁の花〱 仙溪

花材 白文字(楠科) 水仙(彼岸花科)
アスター(菊科)

花器 陶水盤

シロモジはハタウコンとも呼ばれ花はアオモジやクロモジに似る。枝はとても硬いため器の外で剣山にとめてからつけた。アスターは別名エゾギク。赤花の品種は水仙によく似合う。



バラの実と薔薇

〆3頁の花〱 櫻子

花材 薔薇の実(薔薇科)
薔薇数種(薔薇科)

花器 陶花瓶

バラ園から届いたバラはつる性のものが多い。バラの実にからませながら少しこちらを向いて微笑んでくれている様だ。





寒椿

仙溪

先月から家族が一人増えた。名前は「柊介」とつけられた。良い名だ。ヒイラギの白い小さな花は秋の庭に甘い香りでその存在を知らせてくれていた。その香りは彼の誕生を心待ちにした日々と重なる。

中庭のヒイラギの横で、紅白のカンツバキが彼の誕生を祝ってくれている。

11月中旬頃から1月にかけて、中庭に咲く紅白のカンツバキ。秋から咲いて花びらが1枚ずつ散るのでサザンカと呼ぶこともできるが、本来の名前はサザンカとツバキの交雑種であるカンツバキ「シシガシラ」である。獅子頭は獅子舞の獅子の頭のことと邪気を追い払う力があるとされる。柊介ちゃんのすこやかな成長を願う。





寒椿の生花 2作 仙溪

花型 草型 留流し(4頁)

草型 副流し(5頁)

花材 寒椿(椿科)

花器 銅花瓶(4、5頁)

赤花のカンツバキ(もしくはタチカンツバキ)の大きな枝を数本買って生花を2作つけた。赤茶けた葉色が季節を感じさせる。5頁の「副流し」は苔の付いた太い幹で景色をつくった。4頁の「留流し」は長い横枝を留に生かし、庭の白花カンツバキを切って留の沈みと控に加えている。

色と形の違う銅器にいがたが、どちらも安定が良く又配りがしつかりかけられていけやすい。とても重宝している。



横から見た奥行



白玉椿の生花

△6頁の花▽ 健一郎

花型 行型

花材 白玉椿（椿科）

花器 陶花器

11月にテキストを創刊から今までもう一度読み直した。白玉椿は曾祖父のお気に入りの花だったそうで、それは文章、写真から十分に伝わる。白玉椿の品や、奥深さに魅了されていたのだと思っている。そして、曾祖父の白玉椿の生花は他の生花と比べても特別な雰囲気を感じているように感じる。

私も白玉椿の生花を生けて写真に撮ってもらった。

孫である私の母は、そんな祖父が椿を生ける時のモノマネをよくしていたらしく、40年ぶりに私にもその姿を見せてくれた。椿を撓めるときに唇を尖らせるらしい。そんな昔話をしながら、再び私は母親と一緒に白玉椿の生花を生けて楽しんでいた。先祖から脈々と受け継がれる伝統とも言えるバトンの一部を預かった気がしている。焦らずゆっくりとお花を味わっていき



柗南天桐の立花

△7頁の花▽ 健一郎

花型 除真立花^{のきしん}

花材 白玉椿^{のきしん} (椿科)

若松 (松科)

寒桜^{はら} (蔷薇科)

柗南天^{ひいらぎなんてん} (目木科)

伊吹^{いぶき} (檜科)

寒桜^{はら} (蔷薇科)

肥後菊^{ひごけきく} (菊科)

花器 陶花器

流祖の立花の中には「古人も挿しもらしたる花形」として新たに立てた挑戦的なものがいくつかある。「南天桐」もその一つだ。そこから着想を得ているが、自分なりに草木の赴くまま立ててみた。

他の役枝に柗南天を配してもとは思うがなかなか請などにあうものはない。

常緑の植物中心にとりあわせ、柗南天の葉の色を生かそうとした。





12月の薔薇と若松
 △表紙の花▽ 櫻子
 花材 若松の脇枝（松科）
 薔薇（薔薇科）
 オンシジウム（蘭科）
 花器 陶花瓶（トルコ）
 京都おくだバラ園からは冬にもいろんなバラが届けられた。返り咲きや四季咲きのバラ。見事な花を咲かせている。香りのよい赤バラには1本の茎に4〜5輪も大輪の花を咲かせているのに、しなやかで折れる事はない。クリスマスから新年にかけて華やかにエレガントに咲いてくれた。



カンツバキとメイちゃん。



家元とレモン師匠。お花拝見！

立華時勢粧を読む⑥4 仙溪

梅

古歌

万代に咲るなかにも初名草※春
をまたでや花を見るらん

立華時勢粧の立花秘傳抄には和歌が多く引用されていて花の異名※を知る事が出来る。松、竹、梅で流祖が選んだ歌を紹介してみよう。

松

蔵玉集

大内や百敷山の初代草※いくとし人のなれてそゆらん

同

春の野や雪げの沢の延喜草※花咲きにけり雪におわれて

竹

通用の證歌

木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしに我が身は成りぬべきなり

古歌

秋風はまどなる竹にかよふなり
河玉草※をなにといふべき

月にきく夕玉草※の秋風に音はいつ頃寝覚めとはまし

深山には見雪ふるらし難波人浦
風しほる香栄草※かな

山里の軒端にさける風見草※色をも香をも誰見はやさん

「蔵玉集」とは室町時代の歌学書で、草木・鳥獸・十二月の異名などを詠んだ歌を集めて解説を加えたもの。連歌の参考辞書のようなもので、その前には「莫伝抄」があった。

「蔵玉集」は二条良基(1320～1386)が、「莫伝抄」は源俊賴(1055～1126)がまとめたとされている。

源俊賴は平安時代後期の貴族、歌人で、歌論書「俊賴髓脳」はのちの歌人に影響を与えている。

二条良基は南北朝時代の公家、歌人、連歌の大成者とされている。

連歌とは日本古来に普及した伝統的な詩形の一種で、短歌の上の句(前句)5・7・5に別の人が下の句(付句)7・7を交互に複数人で詠み連ねていく長連歌がある。

先日、南座での顔見世歌舞伎興行に片岡仁左衛門さんが出演されたので見に行つたが、仁左衛門演じる元平戸藩主、松浦鎮信侯は連歌が好きで、歌の師匠・宝井其角を屋敷に呼んで家臣と連歌の勉強会のようなものをする場面があつた。



歌舞伎「松浦の太鼓」の一場面
出典…こんびら歌舞伎オフィシャルサイト

時は元禄15年12月14日、赤穂浪士による吉良亭討ち入りの日の設定。松浦侯は赤穂浪士が仇討ちする様子も無く1年が経つ不甲斐なさに苛立っていた

ところ、其角から赤穂浪士との昨日の風流なやりとりを聞き、ちょうどその時間こえてきた陣太鼓の打ち方から討ち入りを悟り、自分も助太刀に向かうとする。松浦侯の喜怒哀楽の表情にどつと場内が沸いていた。

この歌舞伎の鍵となるのが連歌と陣太鼓だ。前日に赤穂浪士の一人、大高源吾が其角との会話の中で、「年の瀬や 川の流れと 人の身は」と其角が言つたあとを受けて「明日待たるる その宝船」と源吾が返したことを聞いた松浦侯。その意味するところを思案していたところに聞こえてきた陣太鼓。「バン、ドンドンドンドンドン」それはまさに自分が学んだ山鹿流の太鼓であり、同門に大石内蔵助がいたことを思い出す。そして打ち手は内蔵助と確信し狂喜する。

話が立花時勢粧から逸れたが、富春軒が花材解説に選んだ歌に「蔵玉集」という連歌の辞書からの引用があるのは、自らも連歌を嗜んでいたのだと思う。前句に対し即興で機知に富んだ付句を詠むのは、個性ある枝や花を自在に合わせて立てる立花と似ている。どちらもその時代の風流なのだ。



南天の立花

△4頁の花▽
仙溪

花型
除真立花のきしん

花材
南天
(目木科)

若松
(松科)

つ
つ
じ

椿
(椿科)

躑躅(躑躅科)

水仙（彼岸花科）

寒菊 (菊科)

枇杷 (薔薇科)

花器
陶花瓶

先月号の立花図に刺激を受けて、南天と若松の対比を試みた。胸に南天を使わなかったのが見越の若松が目立って感じるが、新春らしい立花となった。庭の佐助椿がいい味を出している。

立花時勢粧の絵図を何度も見比べていると、立てた人の力量に違いがあるのがわかる。

流祖の花は自然の妙を味わい
 尽くしている感じがする。そし
 て個性的なそれらの枝や花がつ
 くる世界感が凄い。



松竹梅

花伝書を見る

立花 まつりか 松除真 まつりきしん

「松竹梅」

富春軒

老松 若松

竹 枯竹 熊笹

紅梅 白梅 苔梅

(立花時勢粧・下)

古来より祝言の花として松、竹、梅を真にした三瓶を並べ

ることがあり、また松竹梅を一瓶に立てることもされたが、他の草木をまじえず松竹梅だけで立てることは古人も指しもらった花形で、真の松竹梅と呼ぶべきか、と書いている。

松竹梅それぞれに老若の対比があり、変化のある竹と共に力強い生命を感じる。

若松の真の勢いに、未来への願いが託されている。



富春軒



良い季節

健一郎

花型 留流し

花材 寒桜（薔薇科）

数椿（椿科）

花器 銅薄端

季節を生けること、味わうことが一番の贅沢であると思っている。出産を目前に妻は毎日御所を最低一万歩以上歩いた。私がお供することもしばしばあった。「あそこめっちゃ赤い！」「あそこめっちゃ黄色い！」と楓や紅葉の葉を指指して歩いていた。銀杏の太木は少しづつ色を濃くしていき、ゆっくりと葉を落としていく。一週間以上も通い詰めるとその様子が良くわかる。

落ち葉を蹴飛ばしながら、寝転びながら、木にぶら下がり、登りながら歩いていく。一つ一つを味わいながら歩いていく。妻はそれを笑いながら写真に収めたり、落ち葉を集めてきてくれる。26歳児の世話は手がかかるそうである。遊び疲れ帰路につくと、一本の桜と出会った。静かに強く咲いていた。足を止め寝転ぶ。これでしばらくは二人きりでの行楽は休止になる。これからは終介と三人で季節との豊かな出会いを味わってきたい。

いけばな

桑原専慶流

テキスト

2024 年

1 月号

No. 727

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





謹賀新年

皆様のご健康とご多幸をお祈り致します

二〇二四年

令和六年

甲辰（きのえ たつ）

二〇二四年は辰年。干支の「甲辰」にあたる。

「甲」は十干の一番目、生命が誕生した状態。木の兄とは陰陽五行説の「木の陽」のことで、急成長、寛大、屈曲、発展を表す。

「辰」は十二支の五番目。草木の成長が一段落して整った状態。いわば春のイメージ。こちらも「木の陽」にあたる。

「甲」と「辰」は「木の陽」が重なる「比和」の組み合わせで、良くも悪くも最も盛んになる。

言葉の音韻「納音」では、甲辰は「覆燈火」にあたり、自身の周囲を照らす意味を持つ。

あまねく光に照らされ、急速な成長と変化が起きる。春の日差しが成長や変化を助けるように、積み重ねてきた事に光りが当たったり、今まで気づかなかった自分の才能が照らし出される。

私たちがいけた花も、周囲の人に光を届けてくれますように。



稽古の花 ③

△2頁の花▽

11月27日撮影 櫻子

ランキンキュラス（金鳳花科）

レモンリーフ（躑躅科）

磁器ティーポット

新春に春の兆しをいける。カラフルな花をシンブルに。家では器選びも自由に。吸水性スポンジを使うと器も安心で、花も悪くなりにくい。



春をいける

△3頁の花▽

仙溪

青文字（楠科）

チューリップ（百合科）

菜の花（油菜科）

陶コンポート

寒さでこわばった心を春の花が解してくれる。花が伸び、開く姿に励まされる。花が共にあることに感謝。



水仙の生花

仙溪

水仙（彼岸花科）
ひがんばな

煤竹竹筒
すすたけ

昨年2月7日撮影。1月は水仙の花をやや高めにする。いけて2週間後の写真です。

水仙の生花は花、葉の順に袴（株元の白い部分）から抜きとり、いけたい長さに組み直して袴にはめ直す。真のような長い葉を元の袴にはめ直すのは容易ではないので、細めの葉を太い袴に組み直しています。

竹筒でいける時は筒の中に入る長さを考慮しておく。

当流の水仙は自然味を損なわないことを大事にしています。姿良くいけられるようになったら、今度は手を加えずにうに。手にした水仙が作る形を、その都度楽しむような気持ちでいけると、ハツとするような新鮮な表情を見せてくれることがあります。

技術を身につけると、植物本来の自然味を大切にすること。そのどちらが欠けてもいい花はいけません。





白花のサザンカ（もしくはカ
 ンツバキ？）の生花だが、細枝
 は折れやすく、かなり無理をし
 ている。「内副流し」に
 カッコ良くおさまったが、傷め
 たぶん咲かずに終わった花が
 り、形はそこでも花が最後
 まで咲く扱いをするべきだつた
 と反省。形も花の力も、どちら
 も大事。

山茶花の生花
 山茶花（椿科）
 煤竹竹筒
 仙溪



横から見たところ





新年の稽古の立花

健一郎

竹(稲科) 若松(松科)
 雲竜梅(薔薇科) 檜葉(檜科)
 紅梅(薔薇科) 寒菊(菊科)
 赤芽柳(柳科) 枇杷(薔薇科)
 銅立花瓶

ありがたい事に、月一回の立花の稽古をするようになって1年が経とうとしている。お弟子さん達の上達には驚かされてばかりで、一人一人がそれぞれの道に進んでいる。その月の花を決める時、お花屋さんがいとも勢いのある、ひねた面白い物を準備して待っていて下さる。夏には河骨や蓮、砂物の稽古もできた。毎回花展かと勘違いするくらい贅沢な時間である。

写真は年末の稽古の立花だ。松竹梅で、竹の葉は散りつつあるが、寒菊がよく咲いている。程なくして紅白の梅も咲き、良い年明けを迎えられた。



東北地方の立花

健一郎

蝦夷松（松科）
米栂（松科）
椿2種（椿科）
木瓜（薔薇科）
児手柏（檜科）
晒木

陶花器

椿の自生の北限は青森県まで、蝦夷松の自生の南限は岩手県までらしい。合わせてみるとすぐ場所が絞り込まれた気がする。それより先へ人が持ち込めば花は咲いたとしても、居心地は良くなさそうだ。

冬の蝦夷松、椿、共に大好きな景色である。蝦夷松は大きな枝になると枝が下に向く。椿は葉の上にも下にも多くの蕾を持つ。どちらも雪の重たさに適応してのことだろう。

米栂の枝ぶりが良くて請流枝立にした。蝦夷松の勢いを受け止め、流している。花がより魅力的に見える器を選んだが、新鮮味を感じている。



花伝書を見る

柳除真立花「おもとまえおき万年青前置」

富春軒

枝垂柳 紅梅 白梅 つげ 柘植

万年青 檜 かなめ 要 しだ 羊齒 苔木

(立花時勢粧・下 秘曲の図)

(解説は9頁へ)



富春軒

万年青の前置

△8頁の立花図▽

『立花時勢粧』の「万年青」の項目には次のように書かれている。

「老母草は前置ばかりに用いてほかにつかうことなし」

「花道第一の秘伝の物なり」

「おもとに指し合わせぬ物草木の実のたぐい、広葉のたぐい、著我、水仙、熊笹」

「奇数につかうのは常のこと、偶数につかっても苦しからず」

「葉組しまりたるは幽玄ならず、ゆるやかなる時はくだけて勢いなし。緩からず、急ならず」

他にも、万年青の出生玄妙なところを見せられるようになるには、よほどの熟練が必要だと書いている。

さて、この絵を見ると、枝垂れ柳も柘植も紅梅も、とても動きがあり、斜めに吹き下ろす強い風を感じるが、それとは対照的に万年青はどつしりと構えている感じがする。もともと海岸部の山地に自生し、過酷な環境に適応してきたことを思うと、万年青には何事にも動じない、

母親のような強さがある。老母草の名前も頷ける。赤い実に優しい愛情を感じる。

『立花時勢粧』118作の内3作に万年青が使われている。この枝垂れ柳と紅白の梅の他に、あと2作。そのどちらも「桜一色」だ。

春の兆しを香りで告げてくれる梅。春の息吹を象徴する桜。それらを足元で見守る万年青。そんな自然界のドラマを想像しながら絵図を見ると、流祖・富春軒に少し近づけたような気持ちになる。おそらく流祖自身が木や花の気持ちになつて立花を立て、自ら創つた世界を木や花の心で味わっていたのだろう。まさに仙人の境地といえる。



「桜一色」の万年青の前置

水仙一色の立花

△表紙の花▽ 仙溪

水仙（彼岸花科）

金盞花（菊科）

陶コンポート

以前は葉先まで針金を入れていたが、今はできるだけ短く、もしくは花のみに針金を入れて立てている。無理に作つた感じにならず、長くもつてくれる。

前置のキンセンカは『立花時勢粧』にも使われている。流枝と控枝の後方、腰のところにもキンセンカを加えた。前からは見えないけれど、腰は大切。



こんな感じにいけてね。

中国の挿花③

仙溪

前号で紹介した絵は明の第5代皇帝、宣徳帝（宣宗）の時に描かれている。宣徳帝は自分でも絵を描くのが好きだったようで、花や鳥、猿、羊、猫などの絵が伝わる。どの絵にも自然の風趣を愛でる繊細な心を感じる。

「壺中富貴図」では吊り下げられた銅壺に牡丹がいけられ、猫が見上げている。中ほどには磁器の三足洗が見える。宮中の点景を描き留めたものだろうか。花と猫、静と動の対比が面白い。宣徳帝は猫が好きだったようで、「花下狸奴図」では太湖石の前に菊と2匹の猫が描かれている。狸奴は猫の異称。

この絵の上部には「神肖烏圓」と書かれてあり、神のような猫、という意味らしい。偶然にも家の猫達と似ている。

「壺中富貴図」の吊り花は牡丹だけでいけられ、前号の春節を祝う10種でいけた重厚な挿花とは対照的で、身近な日常の花という感じである。洗は元々手や顔を洗うためのものなので、皇帝が寝室で牡丹を眺め、香りを楽しむための挿花なのかもしれない。もしそうだとすると、あえて白い牡丹だけをいけているのも頷ける。

宣徳帝の描いた挿花図をもう一点紹介

介しておこう。「嘉禾図」は瑠璃瓶に粟が一本挿されているだけの絵だが、穀物の実りの美しさを絵に描いておきたいという気持ちを強く感じる。四方に垂れる穂と葉の姿。畑にあれば群生の中の一本来にすぎないものを、特別な器に挿すことで感じる神々しさが描かれている。

明代の宮廷における挿花には花材ごとに意味があり、その時その場に相応しい花材を選んでいることが基本理念としてあるようだが、宣徳帝の

絵を見てみると、純粹に花を器に挿すことで生まれる特別な雰囲気を感じる。心、自然と人を同一のものと見る心も大切にしていたのだと感じる。



㊤「壺中富貴図」明代 宣宗（宣徳帝）1429年
 ㊦「花下狸奴図」明代 宣宗（宣徳帝）1426年
 ㊤㊦㊧：台湾国立故宫博物院所蔵。どれも宣徳帝が描いたもの。
 出典：台湾国立故宫博物院アーカイブサイト ㊤ <https://digitalarchive.npm.gov.tw/Painting/Content?pid=5804&Dept=P>
 ㊦ <https://digitalarchive.npm.gov.tw/Painting/Content?pid=3220&Dept=P>



㊧「嘉禾図」明代 宣宗（宣徳帝）1427年



出典：<https://digitalarchive.npm.gov.tw/Painting/Content?pid=5805&Dept=P>

物忘れ（道について）

健一郎

「あれなんやつたつけ、あれや、あれ。」ここ最近固有名詞が出てこないことが多い。お水とつてとお願ひしているつもりで本貸して、と言っていたりする。妻にはいつも迷惑をかけているが、その時の状況などから何を言いたいか推測し話を合わせてくれている。言い間違えをするようになって、幾月かたつが、当初は上手に言葉が出てこないことに苛立ちを覚えたが、今は妻の理解もあり穏やかな日常生活を送ることができている。

そんな日常を離れ中国へ。帰国後、以前にも増して言葉のない世界が心地よく感じ、中国の歴史や人、文化に対して興味が湧いて本を読み漁った。その中でも祖父が最も影響を受けたという、『生活の発見』という本をもう一度読み、中国での旅を終えて、現地の友達と話して、感じた価値観と照らしあわせてみると、当時は分からなかったことが次々に腑に落ちた。

そして今まで自分が考えていた事（今までテキストに載せて

いるような事）が莊子、陶淵明の思想と近い気がした。言いすぎていることは百も承知だが、莊子の文章に関しては自分の文章を読んでいるのかと錯覚するほどであった。以前は自分の描く理想に対して必要であると考え、半ば義務的に目を通していたのだが、読むべくして中身を味わえることはなんと幸せなことか。読書とはこうありたい。莊子の文章は友を得た気がし、陶淵明は文字が作る情景に身を浸せた。これからの気の赴くままに本を手にとろうと思っ

て、
莊子はよく老子と合わせて、老莊思想とまとめられる。老子は万物は道から生じ、最後は道に帰ると言う思想だが、莊子は天地の巡りのままに、その働きと自分自身を一体化し、自然の「氣」とぴたり調和しその世界に悠々と遊ぶ者である。

莊子の中でも有名なものに包丁の話がある。庖丁（ほうてい）という人が一本の牛刀を19年間使い、数千頭も解体しても刃こぼれ一つさせていない。牛は苦痛を感じることなく、死んだことにも気がつかないという。その訳を道を体得したからだとい

うが、その道とは牛の体の天然自然に即して刀を使う技に他ならないという話である。達人の技に見えるそれは、自分の働きかけでなく、他を生かすという行為が根本にあることを伝える教訓の一つである。庖丁さんのちに包丁の語源にもなっている。

流祖が伝書の中で「立花色の事」にて、立花の奥深さを出すための秘伝として例に出している、橐駝伝の話ともよく似ている。

どちらも、真の達人が本人の力のみによつてではなく、相手の生まれもった生きる働き「道」に即すことで、周りの人から見ると驚くようなことをやってのける類の話である。庖丁さんの話は、その原初ともいえるのかもしれない。そして、分野は違えど達人と言われる人達は似た話をする。

育児休暇を経てグループホームに復帰し、認知症の利用者さんと話していると、忘れる事を認め、堂々と自立して生活する利用者さんは当たり前のようにな格好良い。達人と言われるものをその中に見た。そして、その人はそれをなんとも思っていない。私も、達人を見つける事が

できて、やつとスタートラインに立てた気がする。ここでの生活も僕を構成する大切な、場所だ。点と点が、繋がり短い線がたくさんあったが、それを集めてみると、円のように終わりがなく、全てが関係しあつて成り立つ図形の輪郭がぼんやりと見える。道って面白い。

流祖は、いけばなの世界で「花道」と初めて言葉にしたという意味でも華道史のなかで注目されている。中国の『本草綱目』や、詩を原文のまま引用したり、軒号を富春軒としていることから、中国に対して造詣が深かったことが推測される。日本人が考える道と、中国における道の解釈は違っているのではないかと感じることもある。私は、中国での「道」と言う理解が流祖の残したかった「花道」なのではないかと考えている。

そして中国でも「道」という言葉は複数の意味を持つ。老子と莊子でも道の解釈は違っている。江戸や今の日本では、孔子のとなえる儒教的な意味あいである「道」という言葉が使われていると感じている。「道徳」の道と同じ意味合いである。

莊子の道とは、一切の分別や判断を捨て去り、身体や五感を

忘れて道と一体となることで、「吾れ我れを喪れた」の境地がそれを表している。

究極にまで五感を研ぎ澄ました先にその世界があると考えている。私は莊子の説く道と似たものを歩こうとしているが、その道は険しそうだ。

陶淵明はその点、家族、自然との調和を求めている気がする。人間本来の生き方を「自然」と言う言葉で表している。

個人的には、莊子ほど極端な思想ではない人間臭さが気に入っている。陶淵明も忘れることに對して重きを置いているように思えてならない。重きを置いているというより、本当にそのものに夢中になつた時にその人は吾を忘れて、そこにいないのかもしれない。言葉で捉えきれないこの世界と向き合っているのだろう。

花に溶けることを目指している僕の気持ちは悪くなかつたなと思わさせられる。家族から心配される物忘れも順調？に進行している。蛇足だが、ここ数日で母親の物忘れ、妻の物忘れも進行している。影響されているのかお互いになのか。聞いたことのない話だけに今後が楽しみである。



春を告げる花

桜子

ユーカリ・ニコリー（フトモモ科）
エビデンドラム（蘭科）
ストック（油菜科）

陶鉢

真冬の冷たさの中、良い香りがすると一瞬春の気配を感じる。ストックの甘い香りとユーカリ・ニコリーの清らかなミントのような香りが混ざり合って、季節の先取りをしたような感覚になり不思議。

ピンク、淡い黄色、鮮やかな緑の組み合わせは春らしくて部屋を優しく温かな雰囲気に変えてくれる。年ごとに春が短くなリつつあり恐れているが、香りや彩りを工夫して季節を感じる花をいけていきたいと思う。

